

「セシアの黒騎士」改題

# ルナティック・ドール

晩 ばん

蔵仁 くらにん

その宇宙船は、彼方の恒星の光を受けて美しく輝いていた。  
名をイシュカオンという。

船尾から優美に突き出したイオン噴射管の数は、設計に費やした年数より多く、建造にかかった費用のグリュック・サファイアの数より少い十三本だった。

流線型の船体前部に、他に比べ輝きの鈍い部分がある。

そこでは、巨大な船を操る一人の男が、複雑な計器を前に、ゆったりとした椅子に腰を下ろしていた。

快適な船旅だった。

ロイ・シモンは満足げに広々とした操縦室を見回した。

隕石帯一つない安全な定期航路を行く豪華客船の船長。

それが、彼が今まで、人生のすべてをかけて積み上げてきた到達点だった。

彼以外に、人間の乗務員は乗っていない。

彼と三十四体のアンドロイド、ロイド・パーサーと呼ばれる、が、この巨大な

客船の乗務員のすべてだった。

ロイは、無意識のうちに口髭を撫でている自分に気づいて苦笑する。

いっこうに老けない童顔に嫌気がさして、四十になった時に伸ばし始めた口ひげを、妻のマリイは嫌がっていた。

その妻も三年前に死んだ。

手が口ひげから胸もとに移動して、小さなロケットをまさぐる。

蓋を開ける。

伸び上がるような音と共に、ホログラムが起動され、若々しいマリイが彼に微笑みかけた。ロイの口元が動き、変わらぬ愛の言葉を妻に伝える。

突然、彼を甘い思い出から現実に戻したのは、犬の遠吠えのような警報音だった。悲しげに長く尾を引く嫌な音だ。

立体レーダーに眼をやったロイは、あるはずの無いものを発見し瞳を大きく見開いた。

巨大隕石だった。

イシユカオンのタキオン・レーダーシステムは、数光年先まで進路上の障害物を探知できるはずだった。

確かに、先ほどまでは何も無かった。

進路上に、突如、隕石が出現したとしか考えられない。

ディスプレイには、拡大された隕石の表面が映っている。

恒星の光とクレーターの陰影で、隕石表面は、一瞬、笑う女の顔に見えた。

マリイに似ている。

ついで画面が切り替わり、予想進路がディスプレイに表示された。

『警告』の文字が赤く明滅する。緊急回避。船長の指がキーボードで踊り、命令が打ち込まれた。

しかし、ロイは、打ち込んだ命令が有効だとは思っていなかった。

双方の速度と進行方向から考えて、衝突は避けられない。

「おおー！」

突然、ロイの口から絶望の呻きがもれた。頭を抱える。

客室に、緊急脱出用の保護ゼリーを装填していない事を思い出したのだ。

「ロージエンティ……」

隕石が衝突した時の超豪華客船イシユカオンの総乗客数は、わずか五十名。

全員が銀河ソサエテのメンバーだった。銀河を動かす一握りのエリート集団だ。

彼らは、サロンごと船に乗り、世間には秘密裏に移動している最中だったのだ。

「ロイ」

男にそう呼ばれて、彼は鳥肌が立った。

イシユカオンが出航して以来、連日、大広間では賑やかなパーティーが催されていた。

お偉方えらかたの生活になど興味のないロイは、その席には行かなかったし、呼ばれもしなかった。

だが、出航一週間後に催された主要メンバーの誕生パーティーには、顔見せを兼ねて、是非にと招待されたため仕方なく出席した。

そこで、初めて銀河ソサエテのリーダーと目されている、サー・ロージエンテイと会ったのだった。

いけすかない男だった。

四十代後半。長身、きれいなでつけた銀髪銀髪の髪、青い瞳、一部の隙もない

伊達男だておとこ。

だが、ロイの鋭敏な臭覚は、その秀麗な仮面の下に隠された、下卑た魂を嗅ぎ取っていた。

下級船員から身を起こしたロイは、その若き日、荒くれ男と共に多くの時間を過たごした。

彼らは悪ワルだった。

喧嘩など日常茶飯事。盗みもやれば、かっぱらいもやる。

時には殺しだったやっていたかもしれない。

だが、彼らには嘘がなかった。

悪かも知れないが薄汚くはなかった。

だがロージエンテイは……

ロイは、ロージェンティに、きれいに磨き上げた処刑用のナイフを重ねて見ていた。

殺しを殺しとして自覚せず、ただ無意識に、あるいは作業として他者を傷つける鋭利なナイフだ。

傷つけた後は血を拭って知らぬふりをしている。

しかし、一度血を吸ったナイフは、後でどれほど磨こうとも、その表面に濁りが残る。

薄汚れたナイフは、陽光にさらせば、たちまちその濁りをさらけ出す。

パーティ会場のシャンデリアの明かりは、弱々しすぎて、薄汚い真実を映し出さないだけなのだ。

この隠密の旅が、名実ともにリーダーとされていた、サー・ロナルド・カルソンが事故で亡くなり、ナンバーツーだったロージェンティが銀河ソサエテの長おきとなつての初仕事だった。

「ロイ」

「何でしょう。サー・ロージェンティ」

「あの、なんとかゼリーというやつを、どこかにやることはできないのかね」

「ゼリー？保護ゼリーですか？なぜです」

「臭いだよ」

意味がわからなかった。保護ゼリーは、どんな安船にも設置は義務づけられている。

第一、あれがなければ、いざ事故が起こった時に、どうあがいても、誰も助からない。

「臭いなど、ほとんどしないとと思いますが？」

実際、臭いは少しする。プラスチックを溶かしたような軽い刺激臭だ。それを嫌がる者もいるにはいるが、好き嫌いの問題ではないのだ。

「ミス・オバノンが嫌がってね。私も気になっていた」

「しかし、あれは緊急脱出用の……」

「この船に、事故は考えられないのだろうか？」

「ですが……。法で決められているのです」

「なら、その法を今、変えよう」

勝ち誇ったように言うと、声を張り上げ、パーティ出席者に対して

「これを正式な動議とする。コンピュータ。議事録を取れ。では、評決をとろう」

「賛成」

「賛成」

すべての声がそれに和した。

ロイは知った。

この男は、自身がつかんだ権力の大きさを、皆と自分自身に示したいだけなのだ。

「過半数を超えたな。では決定だ。船長。ゼリーを抜きたまえ」

「しかし、船室を選んでゼリーを抜くわけにはいきません。すべての船室からゼリーを抜くか、残しておくか、の選択になります」

ロージェンティの顔が陰しくなった。

「評決はなされた。船長。これは命令だよ。抜きたまえ」

怒りのあまり、ロイの顔は白っぽくなった。

こいつらは、日常、こうやって星々の命運を決めているのだ。

曰く。ミザヌ星のトーキサイト割り当てはどうする。減らして。理由は。あの星の大臣ったら、わたしのスーザちゃんを汚いワンコロなんて言うんですもの。

『汚いワンコロを私の部屋から出してください』なんて。分かった、評決をとろ

う。ミザヌ星のトーキサイト割り当てを五パーセント減らすという動議がなされ

た。賛成。賛成。よし決まった。

つまり、宇宙はこういった輩によって動かされているのだ。

だが、結局は、それが連中の墓穴を掘ることとなった。

自分が、あの男と共に死ぬとは、なんと皮肉なのだろう。

見る間に大きくなる巨大隕石に眼を据えた船長は、そつと妻の名を呟いた。

「緊急警報。進路に障害物。衝突予定時刻まで、あと三分。保護ゼリーを装着してください」

突然の警報に、特等船室で、トランス・アルミの窓越しに三歳になる娘に恒星の名を教えていた若い母親は顔色を変えた。

乗船の祭に緊急時にとるべき行動は教わっている。

すぐに母親は、娘の手をひいて、ドアの横にあるエマージェンシー・ボックスに走った。

扉を閉め、ボタンを押す。

それで、天井から吹き出した透明な保護ゼリーが真空と宇宙線と衝撃から二人を守ってくれるはずだった。

が、何も起こらない。故障している！

「緊急警報。進路に障害物。衝突予定時刻まで、あと二分三十秒。保護ゼリーを装着してください」

「できないのー！」

非常な警告に母親は叫んだ。

「装着できないのよー！」

彼女は、例のパーティに出席していなかったため、保護ゼリーが抜かれていることを知らなかったのだ。

恐慌をきたした母親は、娘と共に廊下に出た。

すぐに、ロイド・パーサーが走り寄ってきた。

「早くゼリー・ボックスにお入りください」

「故障しているのよ」

「こちらへ」

レッド・クリプトン燈が明滅する廊下をロイドの指示に従って、隣室入る。

ボックスに入り、ボタンを押す。反応が無い。

「だめだわ」

ロイド・パーサーは、部屋の端末に腕から伸びるコードを接続しながら言った。

「理由は分かりませんが、すべての部屋から、ゼリーが抜き取られています」

「緊急警報。進路に障害物。衝突予定時刻まで、あと一分。保護ゼリーを装着してください」

無情な声が部屋に響く。

「せめてこの子だけでも……」

「動物用の保護ゼリーなら使えるかも知れません。あれは個別装填システムですから」

「どこなの？」

ロイドの多関節指が部屋の隅に示したのは、五十センチ四方の立方体だった。

トランス・アルミ製で、中が透けて見えている。

「大人は無理でしょうが、子供なら、あるいは……」

母親は頷き、扉を開けて、娘を押し込む。

「嫌っ」

幼心に母との別れを感じてか、強く娘は拒んだ。

「これを持って行きなさい。お父様からいただいたものよ」

彼女は、そう言って自分の首からクルスを外して、娘の首にかけた。

涙でバラ色の頬を濡らす娘にキスをして、ボックスに押し込む。



ボタンを押すと、ガスが抜けるような鋭い音がした。

娘がゼリーに包まれるのを見て、安堵の表情を見せる。

扉から娘の入ったカプセルを引き出した母親は、ゼリー越しに娘の顔をのぞき込んだ。

ゼリーが触媒となつて、二酸化炭素を分解し酸素を供給するため、呼吸の心配は無い。

母親の美しい頬を涙が伝った。亡くなった夫の名を呼ぶ。

「ロナルド。私はあなたのもとに行きます。だから、私と一緒に、この子を守つ

て」

カプセルをしっかりと抱きしめ、母親は祈りの言葉を発した。

しかし、その言葉が最後まで言い終えられることは無かった。

激しい爆裂音と共に、幾重にも守られた船室から空気が漏れだし、たちまち恐るべき冷気が船室を満たしたからだ。

瞬時に凍った母の涙は、まるで宝石のように無重力になった部屋に浮かんだ。

ゼリー内部の娘は凍てついた母の瞳と涙を見た。

衝撃で大きく進路をそれたイシュカオンは、恐ろしい速度で、一番近い惑星である、セシアに引き寄せられて行った。

青く輝く惑星の反射光が、ピエタのように子供を抱く凍りついた母親の姿を浮かび上がらせていた。

男は、窓の外を流れゆく小惑星群をぼんやりと眺めながら、アルタイル産のキヤレラ・ウオトカを口にはこんでいた。

紅酒ベニシシベとも呼ばれる、血の色にも似た緋色の液体は、オメガ・クリスタルのグラスから男の唇に、滑らかに、そして恥じらうように落とし込まれていた。

唇の両端は、不敵な微笑みと皮肉とが妥協点を見いだした位置まで自然に持ち上げられている。

大きな瞳は心持ちつり気味で、黒目その大部分を占め、浅黒い肌、短く刈り込んだ髪はぴったりと形の良い頭を覆っている。

少しだけ先の尖った耳と、まっすぐな鼻筋がシルエットにアクセントを与えている。

「退屈なの？。リュウ・バセラ」

突然、テーブルの上の金の腕輪が話しかけてきた。

古代イウレカ文明調の彫金がほどこしてあり、中央には巨大なグリュック・サファイアが輝いている。

リュウは、うんざりした目つきでブレスレットを見た。

もちろん、ブレスレットが彼に話しかけてきたわけではない。

ブレスレットを通じて、宇宙船のメイン・コンピュータが話しかけているのだ。コンピュータの名前はミーナクシ。

古代地球の神話で、魚の眼をした女神を意味する名前らしいが、リュウには、そんな、今ではどこにあるか分からない惑星の話に興味はなかった。

物心ついた時から、荒くれ男達とともに、島宇宙を渡り歩いてきた彼にとって、興味があるのは、財宝と金庫破り、そして闘いだけだった。

彼は、ミーナの人間臭すぎる反応が苦手だった。

だが、広い島宇宙を探しても、これほど高性能の小型艇を見つけるのは難しいという事情が、ミーナとの腐れ縁の原因となっている。

幾度となく、ミーナの自我回路を停止させようとしたのだが、シリコン・チップではなく、生物細胞を使ったコンピュータ、バイオ・ニューロン・サーキットが手に負えず、放置したまま今に至っている。

島宇宙広しといえど、バイオ回路を使っているコンピュータなど聞いたことがない。

ミーナとの出会いは、単純だが変わっていた。

ある時、リュウは、ちょっとした目的の為に、銀河警察の中央指令ステーションに忍び込み、発見されて追われることとなった。

逃げ込んだ貨物庫にあった宇宙船に飛び乗って、危ないところで脱出することができたのだが、その宇宙船がミーナだったわけだ。

「……」

リュウは黙っていた。

ことある毎に、ミーナは彼に話しかけてくる。

なぜ、ミーナは女性の声を使って話しかけるのか？

男の声だつて構わないはずだ。

そう尋ねた時、ミーナはすましてこう答えたのだった。

「あら、だつて最初に言ったじゃありませんか。私は女神だつたつて」

それ以来、リュウはミーナに対して最小限の言葉しか口にしないように心がけている。

「なぜ、話してくださいさらないの。リュウ」

「黙っている！」

「そんな冷たい言い方は無いじゃない。私だつて、あなたのために、色々してあげてるんだから。第一、私はけっこうあなたのお役に立ってるじゃない。このあいだの、アスパリン星系での事を忘れたの？」

「まあ、あのときは少しは役に立ったかもな」

信じられないことに、ミーナは銀河警察の戦闘宇宙船のくせに、リュウの盗賊稼業の手伝いまでやってのけるのだ。

「だが、おまえのいれるコーヒーの味は最低だ。おかげで俺は酒ばかりのまなきやならん」

「そんなの、日の高いうちから、お酒を飲むいいわけにならないわ」

リュウの巴旦杏ハタンキョウのような目が大きく見ひらかれた。

宇宙空間で日が高いというのはどういう事だ、という言葉が、のどまで出かかったが、結局黙っていた。

機械相手に理屈をこねても仕方がない。

それに、天下無敵のリュウ・バセラも、この世話女房みたいな口を聞くコンピューターだけは、なんとなく苦手だったのだ。

「お酒って良くないと思うわ。普段は無口なあなたが、同じ曲の鼻歌を三回続けて歌うんだもの『たまゆらの……』」

リュウの大きな目がさらに大きくなった。

「なんだったって？」

「ねえ、リュウ。歌というのは何か特別な力を持つてるの？人を感動させたり、何かを思い起こさせたり……」

「なぜだ？」

「あなたのような男ひとまでが、知らない間に口ずさむんだから」

「俺のような男、か」

ミーナが、どういふつもりで言ったのかは、よく分からなかったが、その言葉は思ったより強くリュウの心にひっかかった。

昔、愛した女が、そう言って去っていった事を思い出したからだ。

「あなたのような男は、女を好きになってはいけないのよ……」

もちろん、そうだ。

盗賊稼業とうぞくを生業として、危険を好む男と暮らすなど誰が望むだろう。

時と共に痛みは薄れたが、思い出は、時折、フラッシュバックのようにリュウを襲い、彼の思考を止めてしまう。

世間は知らないのだ。

硬質の金属でできたナイフのような無法者が、ガラスのようにもろい心を持っている事を……

だが、それでいい。彼の方も世間にそれを知らせるつもりはない。

そんなリュウの思いをよそに、ミーナは続ける。

「もし音楽にそんな力があるのだとすれば残念だわ。メロディーは、私にとっては、ただの空気振動の羅列に過ぎないもの……」

「あれは、ミルキィ・ソリムが歌った『地球の青い海』だ」

これ以上、ミーナの無駄口を叩かせないためにリュウは言った。

「あの歌には……」

「ジャン・ロックモンドの思い出があるんでしょ……」

「どうしてそれを知っている。そのことは、今は俺しか知らないはずだ」

「銀河警察に残っている、あなたのファイルの中で、『地球の青い海』という歌が関係しているのは、『セシア星におけるヌビル教法王暗殺事件』しかないわ。

その事件で、あなたが関係を持った男は、ジャン・ロックモンドだけ」

ほんの数瞬の間に、そこまで調べられるのは、さすがだった。

「いい推理だ、ミーナ。だが、おまえが参照した警察のファイルは、事実とはまるで違うはずだ。そのファイルにはどう書いてある」

「リュウ・バセラ犯罪関連ファイル。ファイル番号二三五四。セシア星において、歌手ミルキィ・ソリム誘拐中に、ソリム嬢を救いだそうとしたヌビル法王を殺害。

共謀者ジャン・ロックモンド。すごいわ。これだけでもガス処刑五回分ね」

「まあ、外れてはいないがな。だが、事実はまだで違う。ミーナ。セシト星までかなりの時間があるな。では昔話をひとつしてやろう。それはひとりの馬鹿で、頑固で、乱暴者だが宝石のような騎士道精神を持った男の話だ」

「久しぶりにあなたの声が長く聞けるのね。うれしいわ」

「黙っている！」

どこの星でもそうだが、特に辺境の星々では、退屈を嫌がり騒動を喜ぶ風潮がある。

セスア星もその例にもれず、たえずどこかで騒ぎが起こっている。

もともと、惑星自体、その繁栄をトランス・アルミニウムの原料となるトーキサイト鉱山に依っているのだから、他の惑星よりも少々荒っぽくなるのはしかたがないのかもしれない。職にあぶれた労働者や、鉱山を見つけてやろうと一獲千金を夢みる男たち、それに中央の銀河警察の目を逃れて流れてきた犯罪者で、街はあふれんばかりとなっている。

カーニバルも近いある日のこと、セスア星でも、指折りの物騒なウイラム市の酒場に、一人の痩せて色の浅黒い男が入ってきた。

トスカ・オルガンが騒がしくなりたて、大声で騒ぐ男達の間を通り抜け、男はカウンターに近づいた。

そして、立ったまま紅酒まにしべを半機械人間のバーテンに頼むと、一気に飲み干した。

リュウ・バセラだ。

騒ぎがおこったのは、リュウが三杯めの紅酒に口をつけた時だった。酒場の入口付近で大きな怒号がすると同時に、一人の男が店の中に投げ込まれてきたのだ。そしてその後で顔中が髭だらけの大男が入口に姿を現した。男の目は酒の酔いと怒りで血走っている。大男は床に伸びている男を片手でつかみあげると、トスカ・オルガンに向けて投げつけた。すぐに店の主人が大男に駆け寄って、気を鎮

めるようにという意味の言葉を言ったが、大男は大声で主人に罵声をとばしている。

「またですよ。まったく、いつも酒を飲んじゃあ人に絡むんだから」

バーテンの呟きに、リュウは尋ねた。

「あの男を知っているのか」

「知っているも何も……。名前はジャン・ロックモンドって言うんですけどね。

奴はウイラム市一の乱暴者で、ここらじゃ鼻つまみ者ですよ。鉱山の採掘道具の修理をしてるんですが、とにかく手に負えない男でみんな困ってます。でも見ての通り、腕っぷしだけは強いもんで、誰もあの男には逆らえないんです……」

バーテンは、ロックモンドが近づいて来るのを見て話をやめた。

「何をこそそと話してるんだハンク」

「いえ、何でもありませんよ、ロックモンドさん。今日もずいぶんと御機嫌なめのようなですね」

「うるさい。おまえは黙って俺のペギン酒でもシェイクしろ」

その時、ロックモンドは、カウンターに物憂げにもたれて紅酒を飲んでいるリュウ・バセラに気づいた。

「何だおまえは。見かけねえ顔だが。他人者か？まあい。邪魔だからどけ」

ロックモンドはリュウを払いのけようとした。

次の瞬間、宙を舞い地面に叩きつけられたのはロックモンドだった。リュウが、払いのけにきた手を逆手に取って放り投げたのだ。

ロックモンドは、一瞬自分に何が起こったのか分からない様子であったが、事態を理解すると同時にうなり声をあげて立ち上がった。

今度は、用心深くリュウ・バセラに対して身構える。

リュウは、紅酒のグラスを目の高さにあげると、グラス越しにロックモンドに向かって、嘲るように言った。

「まあ落ち着けよ、ジャン・ロックモンド」

それには答えず、ロックモンドはリュウに向かって突進してきた。とにかくリュウの前に飛びでて、その強力な両腕で締めあげようというのだ。

しかし、紅酒を目に浴びせかけられて、目が見えなくなり、足払いをかけられて床に転がったのは、今度もやはりジャン・ロックモンドだった。

酒場の中に好奇心に満ちた静寂が広がった。彼らは、いまだかつて乱暴者の大男がこれほどまでに翻弄される場所を見たことがなかったのだ。

静かな酒場に、ホロビジョンだけが、BGMを静かに流し続けていた。

「野郎！」

完全に頭に血が登ってしまったらしいジャン・ロックモンドは、床に転がった酒瓶を拾い上げると、スチールガラス製のテーブルに叩きつけた。そして、ぎざぎざに割れた瓶の切口を凶器とし、うなり声とともに、リュウに向かって飛びかかるうとした。

そのとき、ホロビジョンから女性歌手の歌声が流れた。

「たゆたふ海に 蒼き月 たまゆら翳りて……」

その歌声は、二人のならずものの争いを見ようと、固唾を飲んで見守る酒場の客の間をぬって、ジャン・ロックモンドの耳にも届いた。

その歌声は、ジャン・ロックモンドに劇的な効果を及ぼした。

歌が聞こえてきた瞬間、ジャン・ロックモンドの体は凍りついたように動きが止まり、その手から割れた瓶のかけらがすべり落ちた。

多くの客が好奇の目で見守る中、ジャン・ロックモンドはリュウ・バセラに背を向け、じっとホロビジョンに耳を傾けだした。

その口元は、夢みるようにだらしなく開かれている。



大男の突然の変化を、リュウは面白そうに眺めていたが、ジャンがホロビジョンにしがみついて食い入るように歌手を見つめだすと、カウンターにもたれて、バーテンのハンクに尋ねる。

「一体どういうことなんだ」

ハンクは生身のほうの肩を大きくすくめると、呆れたように言った。

「なあに、いつものことさあ。ジャンはあの歌を聞くと、猫みたいにおとなしくなるんですよ。シリル星のジャバ・キャットみたいにね」

ハンクは、辺境の星シリルに棲息する、音楽を聴くとおとなしくなり、時に涙を流すと言われている猫の名をあげ、

「だから奴のことを、ジャバ・ザ・ロックと陰口をたたく者もいます」

「なんとという歌手だ」

こここのところ、彼は警察から逃げ回るのに忙しくて、どんな歌が流行っているのかまるで知らなかったのだ。

「おや、ご存じないんですか。いま、銀河中で大人気のミルクィ・ソリムを」

「ミルクィ・ソリム」

リュウ・バセラは、透き通るような澄んだ声で、はるか宇宙の果て、今では誰も顧みない、銀河中に散らばった人類発祥の地、地球にあるという果てしなく続く青い海への憧れを歌う歌を聞きながら呟いた。

ホロビジョンに浮かび上がるミルクィ・ソリムは、細く折れそうな体をした清楚可憐な少女だった。年は十六、七だろうか。

「しかしね、旦那。ミルクィ・ソリムについては、悪い噂もあるんですよ」

半機械人間のハンクは、ジャン・ロックモンドに聞こえないように、人口声帯の低、中音域を下げて話しかけた。

「どんな噂だ」

「いえ、それが、ミルキイ・ソリムはあんなに清純そうに見えるけど、実は貧民街の出身で、デビューするまでは、いかがわしい連中と付き合いがあったということですよ。それが、ある日を境に大金持ちになって、上流階級に仲間入りしたとか……」

「よくある話じゃないか。芸能界なんてしょせんはゴミのためだ。きれいに光っていても、メッキがはがれば、ただのゴミの集まりに過ぎない」

リュウの隣で酒を飲んでいた赤ら顔の男が酒をあおりながら、つぶやいた。

「そんなものかな……」

「そうともさ。いや、あんだだから言うけどね。俺も昔は銀河ネットワークでちよつとした顔だったんですぜ。嘘じゃない。放送局でなら、誰に聞いたって、トッド・パウエルの名を知らない奴はいない」

放送局の人間でないリュウは、トッド・パウエルの名を知らなかった。

「俺の名前を知らなくても、『リッチモンドのオーロラ』って番組は知ってるはずだ」

それなら彼も知っていた。もう随分前だが、一世を風靡した人気番組だ。

「俺はプロデューサーだった。あの番組のね。俺は、あの番組を成功させるために、随分、汚いこともした。ライバルの番組をつぶすためにデマも流した。

でも、それも、皆がああ番組を喜んでくれていると思ったからしたことさ。

そうでなきゃ、誰が、自分の歳の半分もいかない小僧を相手に、ヘイコラしてご機嫌とりなんかするもんか。なのに、なのに世間は冷てえよ……」

言いながら男はスツールの下に沈んでいった。酔いつぶれたらしい。

「主演女優がスキャンダルを起こしましてね。番組には何の問題も無かったのに、放送終了になっちまったんですよ。で、奴も、管理不行き届きってことでクビになった」

ハンクが紅酒をつぎながら言った。

「今の話は本当か？」

「ええ、リッチモンド・スキャンダルと言えば、そのスジじゃ有名です」

「ミルキイ・ソリムの話だ」

「え？ええ。確かにそういう噂はありますがね。でも、それがもし本当だとしても、今はたいしたもんですよ。何でも、今度はヌビル教法王の前で歌うことになったとか。法王がああ歌がひどくお気に入りだそうで」

やがて、ミルキイ・ソリムの歌が終わった。

ジャン・ロックモンドは身動き一つしなかった。彼は、声一つ上げなかった。肩もふるわせなかった。むしろ、涙も流してはいなかった。

けれど、リュウ・バセラには、この荒くれた無法者が泣いているのがよくわかった。歌うのを止めた。

「いい曲だな」

リュウは、ジャン・ロックモンドの広い背に話しかけた。

大男は振り向いたが、その目はすでに光を失っていた。

ジャン・ロックモンドは、そのまま酒場を出て行ってしまい、酒場も元通りの騒がしさを取り戻した。

これが、リュウとジャン・ロックモンドの最初の出会いだった。

次に、リュウ・バセラが、ロイに会ったのは、それから三日後のことだった。

その日は朝から、凍てついた空からやむことなく氷雨が降り続いていた。

リュウは、黒のラノ・パンツに白いシャツをぎつくりと着て、窓から街を眺めていた。

何の飾りもない服装だが、白と黒のツートンが、すらりとした体によく似合う。

塗装の剥がれた窓枠にもたれ、舌が焦げそうな熱い珈琲をすすると、冷気が体から追いつかれるような気がする。

安ホテルの窓から見る景色は侘びしいものだ。

雨の降る日は、なおさらそうだ。

リュウの潜む部屋は、いつも最上階の屋根裏部屋になる。

金が無いからではなく、わざとそうしているのだ。

地下だと、追いつめられて袋の鼠になることもあるが、最上階だと、ロケット・バックさえ用意しておけば簡単に脱出できる。

薄暗い天気だったが、斜めに降りている天井の一部が、トランス・アルミに置き換えられているため、明かりをつけなくても部屋の中は暗くはない。

ただ、安物のトランス・アルミで、精錬が不十分なため、全体が黄ばんでいる。

そのために、部屋の中すべてが黄色がかって見えるのが欠点だ。

今は、凍てついた雨が、時折、こつこつと音を立てながら天窓にぶつかる音だけが部屋に響いていた。

街に広がる石造りの建物は、建てられてから数百年は経っている。

雨に濡れた部分は黒く、それ以外は赤茶けた色をしている。

雨を面倒がってか、通りに人影は絶え、浮遊自動車カスバさえ、今日に限って、めったに見かけない。

まるで、凍った雨という掌に無法都市は封じ込められているように見える。

かろうじて、街の遙か向こうにある、スペース・ポートにだけ活気があった。

遠すぎるため、建物が見える訳ではないが、時折、発着する船のテルミット光によって眩しくターミナルが浮かび上がるから場所がわかるのだ。

ウイラムシティは、ならずものの都市だ。多くの無法者が、絶えずこの都市に流れ込み、出て行く。

無法者には、大きく分けて三種類ある。

一つは、リュウ・バセラのように銀河警察の目を逃れて、逃げ込んで来た者。

セシア星は、銀河連邦に正式に加盟してはいない中立星だからだ。

トーキサイトは、宇宙船を造るのに不可欠な、トランス・アルミニウムの原料だ。そして、セシア星は全銀河の七十パーセントのトーキサイト産出量を誇っている。

トーキサイトという切札を持つセシア星は、銀河連邦以外にも、トスカ連邦とも商取引を行っている自由貿易惑星で、完全中立を保っている。

銀河警察の権力もこの惑星上には及ばない。したがって、リュウ・バセラのようなお尋ね者が、ほとぼりをさますにはちょうどよい星だ。

もう一つは、逃げ込んで来た無法者の首にかかっている賞金目当てのハンター達だ。

賞金首を一人挙げるだけで、半年は遊んで暮らせる。特にリュウ・バセラのような名前の売れた盗賊をつかまえたなら、たとえそれが、生きてままであろうと死体となっていようと、手に入れられる賞金は天文学的な額となる。

そして、最後に鉱山を見つけて一獲千金をねらう山師たちがいる。

しかし、統計的にみても採算が取れるだけの鉱山を見つけられる確率は非常に低い。

それは、宇宙から降りそそいでいる隕石が、燃え尽きることなく地上に落ちてきて、手にしたシャンパン・グラスに飛びこむ、その確率と同じくらい希であるといわれる。

それゆえ、鉱山を手に入れた男達を、人々はシャンパン・ハンターと呼ぶ。

結局、山師たちは鉱山を見つけるために、食べるものも食わずにあちこちの荒れ地を放浪し、夢も気力も枯れ果てて、最後にこの都市に流れ着く。

そして、安物のペギン酒を飲んで、昔持っていた青雲の志を、くりかえしくりかえし、店の女やバーテンに語って聞かせるのだ。

その夜、リュウ・バセラは、相も変わらずトスカ・オルガンが騒がしくがなりたてる酒場で紅酒を飲んでいた。

夜更けに酒場を出ると、氷雨は雪に変わっていた。

リュウは、酔いざましをかねて、燐光石がところどころに埋め込まれ、ぼんやりと明るい街路をゆっくりと歩きだした。朝から降り続いた雨のため、雪はまだ積もっていない

酔ってはいなかったが、熱いくらいの酒場から出ると、外の冷気がうれしく感じられた。いい気分で、ホテルに向かう。

大通りを折れて、二十メートルほど歩いた時、突然襲われた。

もちろん、酒が入っているとはいえ、名だたるリュウ・バセラが不意打ちを受けるわけが無い。

リュウは電光のような反応を見せた。

後ろからいきなり振り下ろされた電撃ブラックジャックをかわしざま、爪先を深く男のわき腹にめりこませる。

と同時に、レイザー・アックスを持った二人目の男の喉に貫き手をくらわした。数メートル後ろに跳びさがって、いま自分を襲った相手を見やる。

男たちは、地面に声もなく転がっている二人の男を加えて、全部で七人いた。中央の腕組みをして立つ大男がリーダーらしい。

リュウ・バセラは腰の後ろにさしたパルス・ブラストを引き抜くと、その並ぶべくもない強力な銃の引金を引いた。

リュウ・バセラはプロだ。相手を確認して、その間に撃たれるようなへまはない。まず撃つのだ。

後悔はその後ですればいい。

しかし、光弾は男たちの前で、斜め方向へはじかれてしまった。と、同時に男たちのパルスレイザーが閃光をはなった。

とっさに体をひねってかわしたものの、その光の一部がわき腹に当たった。突き刺す痛みと共に、肉の焦げる臭いが鼻をついた。

こちらの攻撃は弾かれるが自身の攻撃は通す、単一方向バリアを使っているらしい。

どうやら、相手は完全武装の賞金稼ぎのようだ。

特殊バリアまで用意しているところを見ると、どこかの星の傭兵くずれかもしれない。

リュウの唇の端がかすかにつり上がった。リュウ・バセラもいつかは死ぬだろう。しかし、今、ここでは死ぬのではない。

無法者リュウ・バセラが死ぬ場所は、惑星の、地面の上ではない。

幾億もの星たちが静かに光る、絶対真空の宇宙空間において、彼は死ぬ。

そう信じているのだ。

リュウ・バセラは、ベルトのケースから、銀色のカプセルを取り出すと、地面に叩きつけた。

目のくらむ閃光と共に、灰色の煙がたちのぼり、視界を遮った。

「あと、二キロ走れば良い方か」

高い塀で囲まれた、細長い通路を駆けながら、リュウ・バセラはそう計算していた。先ほど撃たれた傷口からは絶え間なく熱い血が流れだしている。相手はプロだ。あと五キロはこの速さで走り続けなければ逃げきれない。

だが、体は被弾のショック症状で、発熱と悪寒が走り、出血多量のために視界もかすみだしている。

雪はなおも降り続き、走り続けるリュウの肩や背にも薄絹のベールのように降り積もっていた。

流れ出た血が足元にまで流れ、カフカ仕立のブーツを重くするところになると、いかにリュウ・バセラの強靱な体力と意志力をもってしても、走り続けることはできなくなった。

ウイラムシティの中でも、特に無法者の居住区となっているレルケ・スクウエアの一角にまで来た時、リュウ・バセラは地面に片膝をつき、肩で荒い息をしなから辺りを見回した。

これ以上走り続けることができないのならば、ここで戦うのに有利な場所を捜し、追ってくる敵を迎え討ち、一人でも多くの道連れを作るのだ。

だが、出血多量と外気による体温の低下は、予想以上にリュウから体力を奪っていたのだった。

よろめくように、燐光石の剥がれ落ちた路地の隙間に体を滑り込ませた時には、彼の疲労は限界にまで達していた。地面にうずくまって敵の襲来に備えようとするが、ともすれば意識が薄れかかる。その間にも、流れ出る血は、ゆっくりとリュウ・バセラの命の火を消しさろうとしている。

やがて、リュウ意識はゆっくりと遠のいていった。

彼は意識のなくなる直前に、自分に覆いかぶさる大きな影があるのを感じていた。

意識の回復は突然にやってくる。リュウ・バセラは夢をみない。

眠っている時も、起きている時もだ。

最初に目に入ったのは、粗末な天井から下がっているキセノン・ランプの薄ぼんやりした光だった。

とっさに腰に手をやり、パルスブラストを捜した。

無い。



わき腹の傷には、人工皮膚のマルス・ペーストを当てて手当がしてある。被弾による発熱はあったが、気分は悪く無かった。

あわてて起き上がって辺りを見渡すと、右腕に輸血用のマルチ・ニードルが刺さっているのに気づいた。

驚いたのは一瞬だけで、すぐに冷静さを取り戻したリュウは、ゆっくりと辺りを見まわして、自分の置かれた状況を把握しようとした。

いたるところ壁材が剥げ落ちた壁には、鉋山探しに使われるトーキ・サーチャーがほこりをかぶって立てかけてある。床には、山師が好んで使うカナン・ピッケルが、剥げ落ちた壁の破片の横で鈍い光を放っている。

それ以外には、全く何も無い殺風景な部屋だった。

物音を聞きつけたのか、突然ドアが開いて、男が入ってきた。

手にはスープを持っている。

男はリュウに、手に持ったスープを押しつけた。

ジャン・ロックモンドだった。

リュウはスープを受け取らなかった。

「なぜ俺を助けた」

リュウの質問にロックモンド答えず、黙ったまま立っていた。

やがて、ロックモンドは、スープをリュウに押し付けるようにして渡すと、そのまま部屋を出て行った。

扉が重い音を立てて閉まる。

鍵は掛からなかった。

二、三日経つうちにリュウはすっかり回復した。

あれからジャン・ロックモンドは姿を見せなかった。

ただ、一日に二度、黒い瞳の少年が食事を運んでくるだけだった。

少年は、何も話すなと命令されているようだった。

リュウが食事する様子を、眼にありありと好奇心を浮かべて眺めてはいるが、何も尋ねようとしなかった。

そして、しっかり閉じておかないと、今にも何か話し出すのではないかと、自分自身、それを恐れるように、思い切り歯をかみしめていた。

そのため、生来の愛らしい顔が赤面し、小鬼のような顔になっていた。

四日目になって、リュウは起き上がり、体の各部を伸ばしてみた。少し脇腹がひきつるように感じるが、それ以外は大丈夫だった。

枕元には、洗濯された服が置いてある。

前回、食事とともに、少年が持ってきてくれたものだ。

リュウは、服を着ると階段を降りて行った。

一階は作業場だった。

もともと、実際は、作業場と言うより、スクラップ置き場と言った方が近いほど、そこにあるのはガラクタばかりだった。

山積みされたクズ鉄の間に、ジャン・ロックモンドはいた。

横には例の少年がいる。

ロックモンドは、大きなジェット・エンジンを分解している最中だった。

「世話になったな」

近づいて声をかけると、オート・ドライバーを片手に、ジャンが振り返った。

「すっかりよくなったようだね。退屈じゃなかった？お腹は減っていない？」

もういいだろう、というように、ジャンを盗み見ながら、少年は矢継ぎ早に質問をした。

「ああ、大丈夫だ」

リュウは、大男の顔を見た。

だが、ジャンのは汚い壁に掛けられた、小さなスクリーンに向けられていた。

顔色が悪い。

スクリーンでは、アナウンサーが、職業的な笑顔を見せながらニュースを読み上げていた。

「『地球の青い海』を歌って人気上昇中の、ミルキイ・ソリムさんが、本日、行方不明になりました。ミルキイさんは、ヌビル法王との昼食会の後、トリル星でマース主席と歓談する予定でしたが、トリル星に到着後、迎えの車に乗り込むまでの間に行方が分からなくなったものです。当局では、マネージャーのトゥッキーニ氏も行方不明になっていることから、二人の行方を追っています……」

「大変な人気だな。法王と会食の後は、主席と歓談か」

リュウの独り言に、少年が訳知り顔で答えた。

「ミルキイさんの歌は、もともと法王が彼女にプレゼントしたものなんだぜ。それに、あの歌の『地球』って星のことは、みんなが気にしてるからね」

「誰もその場所を知らない、伝説の人類発祥の地、だからか？坊主」

「坊主じゃないぜ。俺の名前はビリっていうんだ」

少年は浅黒い顔色をほのかに紅くして、そう抗議した。

「そうか、世話になったな、ビリ」

リュウはジャン・ロックモンドを見た。髭の大男は、とつくに話題の切り替わったスクリーンを、心ここにあらず、といった様子で見っていた。

「トリル星と言えば、このセスア星から数時間の星だな」

その言葉にジャン・ロックモンドは振り向いて、急に怒鳴りだした。

「黙ってる。うるさく喋っていないで、体が動くならすぐ出て行け」

「ああ、そうする。だが、出て行く前に一つ聞いておきたい。なぜ俺を助けた。

俺は借りを作るのが嫌いなんでね」

リュウの質問に答えるかどうか、ジャン・ロックモンドはしばらく迷っていたようだった。

が、やがて、呟くように小さな声で言った。

「あの時、お前がミルの曲を、『いい曲だ』と言ったからだ」

その時、作業場の隅のドアが叩かれた。

リュウはスクラップの陰に身を隠した。

どこにいようと、リュウ・バセラの首に掛かっている賞金は莫大な金額だ。

ビリが走り寄って、ドア越しに尋ねる。

「どなたです?」

ドアの向こうから、女の声が応えた。

「あの……、ジャン・ロックモンドさんは、おられますか?」

大男の目に驚きの光が走った。あわててドアに走りより、少年を押しつけるようにしてドアを開く。

そこには、白い服を着た少女が立っていた。首には、大きいが上品なクルスが光っている。

間違いない。ホログラフィで見たことのあるミルキィ・ソリムだ。

少女の後ろには痩せた口髭の男が立っている。

「ミル。どうしてこんなところへ?ここは君が来るような場所じゃない」

ジャン・ロックモンドが声を荒げて言った。心なしかその声は震えている。

「ジャン。なぜ会いに来てくれないの。私はずっと待ってたのよ。あなたが迎えに来てくれるのを。今、歌を歌っているのも、私の姿をあなたが見たら、きっと迎えにきてくれると思ったから。八年間も待ったわ。あの日から」

「まあ、中に入るんだ。人に見つかるといけない」

そう行って、大男は、二人の客を作業場に招き入れた。

「ミル。見ての通り、俺は無頼のならず者だ。こんな俺が、どの面下げて君に会いに行ける」

そうやって、ジャンは、口髭の男を怒鳴りつけた。

「トッキーニ！」

「すまない、ジャン。君の手紙をミルが見てしまったんだ。それで、ミルがどうしても君に会いたいと言って聞かなかったんだ。さあミル、もう気がすんだらう。帰るんだ。今帰れば、マース主席との会談に間に合う。君はスターなんだよ。君のわがままで、たくさんの人々が困るんだ」

「一番困るのはあんただろ」

ビリ少年が口を尖らせて言った。

トッキーニは口髭をひねりながら、少年をにらみつけた。

「ミル。歌手の仕事は、俺に見つけてもらうためだと言ったな。歌が嫌いなのか。もしそうなら、おい、トッキーニ、すぐにミルに歌手をやめさせるんだ。食うために働く必要なぞ無いんだからな」

「そんな無茶な……」

トッキーニが泣きそうな声を出した。

「ジャン、私、歌は大好きよ。歌っている時が一番幸せ。でも、私は歌を歌うなら、あなたのためだけに歌いたいの。昔のように」  
少女の瞳に複雑な色が宿った。懐かしさと、憧れと、そして愛情の混じった色だ。

今、リュウには、はっきりと分かった。

ミルキイに関する噂の真実が。

少女は、美しかったがそれだけではない。

彼女には、たとえ泥の中に落ちても、決して汚れない気高さがあった。

泥の中で可憐に白い花を咲かせるラズリットのように。ラズリットは、泥の色が濃いほど、鮮やかな純白の花を咲かせるのだ。

しかし、答える大男の言葉は冷たいものだった。

「あれは昔の事だ。君はまだ子供だったし、身寄りも無かった。でも、君は今ももう大金持ちだし、りっぱな教育も受けている。俺は相変わらずのならず者だ。昔のように、一緒には暮らせない。さあ、帰るんだ」

「いや」

「帰るんだ。おいトッキーニ。早くミルを連れて帰れ」

そう言いすてると、ジャン・ロックモンドは、扉を蹴り開けて、外へ出て行っ  
てしまった。

「ジャン……」

閉じたドアを見つめるミルキイ・ソリムの目に大粒の涙が浮かんだ。

「ミルキイさん」

ビリ少年が手を差しだしながら、言った。

「あのー。俺はビリっていいいます。その、今、ジャン、いやロックモンドさんと一緒に仕事をしています。ロックモンドさんは、あなたの事を嫌っているんじゃないんですよ。それどころか、あの人の部屋はあなたの写真だらけなんです」

「ありがとうございます」

ミルキイは涙を拭いて笑顔を浮かべた。ビリの手をそっと握り返す。

「もちろん、俺もあなたの大ファンなんだ」

ミルキイは、部屋の片隅にひっそりと立つリュウに気づき、少年に尋ねた。

「あの方は」

「ああ、あの人は居候いせうこうさ」

リュウは、ミルキイに近づいた。

ホログラフイで見るより、実物のほうが数段美しい。

リュウは、ミルキイの前に立った。

ミルキイは、目の前に立つ男に、不思議な魅力を感じた。

広い肩幅に小さな顔、アーモンドのように大きなつり上がった目。

自分と同じくらいに若く見えるが、本当はずっと年上のようにも思える。

「ジャン・ロックモンドは、シャンパン・ハンターなのか」

リュウが単刀直入に尋ねた。

「そうです。ジャンは、死ぬほど苦勞して見つけた鉱山の権利を、すべて私に渡して姿を消してしまっただんです」

「君は、昔、ジャン・ロックモンドと暮らしていた？」

「そう。宇宙船の事故でひとりぼっちになって、ただ泣きただけだった私を、あの人が引き取って養ってくれたんです。あの頃は楽しかった。ジャンとトッキーニと私とで、毎日色々な場所に行けて……」

少女の言葉に、トッキーニは目をむいた。

「あの生活が楽しかったって。信じられないよ。食べるものすらなくて、宇宙艇の陰で残飯を食べて寝た事もあった。私は嫌だ、あんな生活は。さあ帰ろう。ジャンもそう言っていたじゃないか」

「いやー」

「聞き分けの無いことを言わないで。君は、まだ彼がセシアの黒騎士だと思っているのかい。あれは他愛もないおとぎ話だよ」

「いいえ、違うわ。ジャンは、私をひどい養父母から救いだしてくれた。ジャンは、セシアの黒騎士よ」

「セシアの黒騎士？」

リュウは呟いた。それを聞きつけてビリが言う。

「知らないの？この街でなら子供でも知っているよ。昔、といっても、ほんの四十年くらい前までだけど、このセシアには王様がいたんだ。その頃から、すでにあった伝説が『セシアの黒騎士』なんだ。

昔、セシアのお姫様が、雷の神様に見初められ、連れ去られてしまった。

嘆き悲しんだ王様は、国中に姫を取り返す勇者を募った。

「だけど、なんと言っても相手は神様だ。」

悪党や悪魔の類なら、名乗り出る勇者も多かったんだろうけど、何せ、相手は神様。誰も恐れて名乗り出ない。

そこへ、たまたま王国へ立ち寄った、北の国の、黒ずくめの騎士が、私にお任せを、と名乗り出た。

彼は、剣に長い導線を巻き付けて、その先を海に引き込んで雷神と対決した。雷神は、何度もいかづちを放ったが、すべてが剣に吸収されて為す術がなかった。

ついに、神は諦めて、二人を祝福して天に戻った、というのが大筋の話なんだ」

「ふむ」

「そう、よくある話なんですよ」

トッキーニが言った。

「誰にでも、そしてどこにでもある英雄崇拜。それが物語になっただけなんです」  
その時、ドアが開いて、ジャン・ロックモンドが帰ってきた。肩で息をするその姿は明らかに酔っていた。

拳は皮がむけて血が出ている。また、どこかで喧嘩をしたに違いない。

「まだ居たのか。トッキーニ。早くミルを連れて帰れ。何度同じ事を言わせるんだ」

「ジャン。君からも言ってやってくれ。彼女はまだ、君の事をセスアの黒騎士だと思っっているらしいんだ。」

ジャン・ロックモンドの血走った目が一瞬とまどったように見えた。

「黒騎士？とんでもない。ミルはまた、初めて会った時の事を言ってるのか。この際はつきり言っておく。あの時、俺はお前が高価な服を着ていたから、きつと金持ちの娘だと思ったのさ。それで、お前を助けたら礼金が貰えると思ったんだ。なにせ、あの時も俺は文無しだったからな。だが、助けてみると、誰の子供かも



分からないし、母親は死んでるし財産は無いで大失敗だった。お前の前から姿を消したのも、トッキーニにお前を押し付けて、厄介払いをするためだったのさ」

「嘘、うそ。私は信じない」

ミルキイは、絞り出すような叫びを上げた。

「嘘も何も、それが真実だ。さあ。帰ってくれ。仕事の邪魔だ」

そう言いながら、ジャン・ロックモンドは、ミルキイ・ソリムとトッキーニをドアから外へ押し出した。ドアに鍵をかける。

リュウは、それを黙って見ていた。

しばらくの間、ドアの外で泣き声が聞こえていたが、やがて、それも聞こえなくなかった。

ビリ少年は、ドアに耳を押し当てていたが、振り向くと、ジャン・ロックモンドに向かって言った。

「ジャン。あんたは嘘つきだ。毎日、あんなに、ミルキイのことばかり考えていたくせに。彼女を見た？泣いてたじゃないか。ひどいよ。あんまりだ」

その時になって、ビリ少年はジャン・ロックモンドが、噴射管に座り込み、頭を抱え込んでいるのに気づいた。

「ひどいな、ビリ。まったくひどい。本当にひどい話だ」

聞き取れない程の声でそう言うと、ジャン・ロックモンドは膝に顔を埋めた。

「本当にそう思っているの。だったら……」

「おい坊主。それくらいにしておけ」

リュウが少年を遮って言った。

「この男には、この男なりの考えがあるんだ。分かるだろう」

「分からない。女の子を泣かせるような考えは、俺には分からないよ」

ジャン・ロックモンドは、ゆっくりと立ち上がると、部屋に通じる階段を登って行った。

リュウも出て行くつもりだったが、何となく出そびれてしまった。

それで出発は明日に伸ばすことにして、一旦、部屋に帰ることにした。

リュウは、ベッドに仰向けに寝転がって考えた。

ミルキイ・ソリムとジャン・ロックモンド。

美女と野獣だ。

だが、同時に、そいつはよくある組合せでもある。

宇宙に、もう一組増えたところで問題あるまい……。

リュウ・バセラは、夜になって、階下の騒がしさに目が覚めた。作業場に降りて行くと、ジャン・ロックモンドが一ニミリ・パルスのカートリッジをチャージしていた。

「どうした。」

リュウが問いかけても、ジャンは答ええない。

その時、つけたままになっていた、ホログラフィからニュース速報が流れだした。

「前日の午後に行方不明になっていた、歌手ミルキイ・ソリムさん宅に、ソリムさんが前日ヌビル法王から受け取った、銀のクルスが送られてきました。このクルスは、ヌビル教国に古くから伝わるもので、昨日法王の手からソリムさんに渡されたものに間違いがないそうです。クルスの表面には、深紅の塗料で”死”と書かれています。銀河警察は、これを誘拐事件と断定し、特別操作本部を設けました」

リュウの脳裏に、ミルキイ・ソリムが首からかけていた、銀の十字架が鮮やかに蘇った。

彼女の笑顔も。

「待て」

出ていこうとするジャン・ロックモンドを止めて、リュウが言った。

「捜す当てはあるのか」

「そんなものは無い。が、とにかくじっとしてはられない。俺が追い返さなければ……」

大男は、右の拳を左の手に叩きつけながら言った。

「俺に任せろ。二十分でいい。彼女の足取りを掴んでくる」

リュウの言葉に、ジャンはまっすぐに彼を見た。

なぜだ、なぜお前にそんなことができる、眼はそう叫んでいた。

だが、大男は、そうは言わなかった。

ただ、リュウの眼をじっと見つめただけだ。

眼の奥に、はめ込まれた真実というピースを探すように。

「おい」

リュウが出て行こうとすると、ジャンが呼び止めた。

振り向くと、大男は何かを放ってよこした。

受け止めて見ると、それはリュウのパルス・ブラストとホルダーだった。

「持って行け」

リュウはニヤリと笑うと言った。

「これで十五分になった」

リュウは、ドアを開け夜に足を踏み出した。

出てみると、建物は広い荒地のまん中に建っていた。

辺りに民家は無い。少し離れて都会の明りが見える。

気温は、数日前と比べると嘘のように暖かい。

セシアは、地軸が傾いたまま短い周期で公転しているために、数日おきに季節が入れ替わる。

撃たれた日から考えて、今は初夏になっていることにリュウは気づいた。

セシアを回る三つの月は雲に隠され、辺りは漆黒の闇であった。

闇はリュウのような盗賊には、馴染みの世界だ。

一般人では、歩く事も出来ない闇を、リュウは風を切る早さで走った。

燐光石の光る歩道まで来ると走るのをやめ、早足で歩きだす。

それでも二分後には酒場に着いた。

相変わらずの騒がしい酒場で、今日も半機械人間のバーテンはシェーカーを振っていた。

「おい、ハンク」

「おや、だんな。久しぶりですね」

「挨拶はいい。聞きたいことがある」

「何でしょう」

「ミルキイ・ソリムについて知りたい」

「何だか、誘拐されたそうですね」

「俺の本業のほうで知りたいのさ」

『本業』と、力を入れて言うと、ハンクはちらっと左右を見た。

「どうぞ、こちらへ」

ハンクについて、バーの奥の部屋に入る。

そこは、小さい部屋だった。

ただ、部屋の隅に据え付けられた端末だけが新しい。

ハンクが、キーボードの前に腰を下ろすのを待って、リュウは言った。

「ミルキイ・ソリムは、タベ、この星にやってきた。そして、行方不明になった。

彼女が誘拐される理由と、この星でそういう仕事をしそうな奴の情報、その他、

彼女についての情報を何でもいいからくれ」

そこまで言って、思いついて付け足す。

「それと、セシアの黒騎士と王制についてもだ」

リュウがプロであるように、ハンクもプロだった。

余計なことは、何も聞かないし言わない。

端末の上の棚から取り出したチップを、ディスプレイ横のスロットに差し込み半機械化人は、寡黙にキーボードを操作した。

ひとしきり、指を踊らせた後、スロットにさされている親指大のチップを抜いて、リュウに渡す。

「希望された情報は、すべて入力しておきました」

リュウは、チップを黒いスーツの胸ポケットに落としこんだ。

「情報代金は、俺の裏口座から落としてくれ。IDは5849057だ」

信用取引だ。請求書も領収書も発行されない。

それだけに、重い約束だった。裏の世界で、情報屋を騙すと二時間以内に死体になる。

今の情報で、小さな都市の年間予算ほどの額になるはずだ。そのかわり、信用度は高い。

リュウは部屋を出ようとした。

「待って下さい」

「なんだ」

「サービスでお教えしますが、あなたの事を、ウルフ・パックが狙っていますよ」  
ウルフ・パック。名の知れた賞金稼ぎだ。死の部隊と恐れられた、カルア星第五部隊の出身で、情容赦の無い人殺し連中だ。

首領は、身長2メートルを越える大男で、名をナインスという。

何でも、やつらは狙いを外したことがないそうだ。噂によると、ターゲットの後をつけ回し、いけると決めると、市街地であろうと、平気で大げさな戦場用のブービー・トラップを張るらしい。

リュウは、単一方向性バリアを使ったこの間の襲撃を思いだしていた。腕組みをして立っている大男の顔が脳裏に蘇る。

「気をつけた方がいいですよ。彼らに狙われて、助かった賞金首はいないそうですから」

リュウは、既にウルフ・パックの襲撃から、一度は逃れた事を言おうとして思いとどまった。

「わかった」

リュウは酒場を抜け、通りへ出た。

前回は、酒場を出たところで突然襲われた。今回も、ウルフ・パックの連中は、酒場を見張っているだろう。

そして、おそらくリュウ・バセラを見つけている。

後々まで、面倒を引きずっていたくないので、リュウは、今夜、決着を着けることにした。

早足で酒場から離れ、ジャン・ロックモンドの工場に向かう。途中で、古びたビルの立ち並ぶ広場にさしかかった。

角を曲がると、二十メートルほど前方に大男が立っていた。

ナインスだ。

その前には、単一方向性スクリーン発生装置が置いてあり、4人の男が地面に身を伏せて、伏射の姿勢を取っていた。

つまり、万全の体制の待ち伏せ場所に、リュウは踏み込んだのだ。

彼らの姿を見るなり、リュウは路地に飛んだ。一瞬後、ウルフ・パックの射撃が開始された。

路地は、行き止まりになっていて逃げ道はない。盾にしている壁も強烈な集中放火にあって崩れ始めていた。

絶体絶命……

しかし、因果な性分だ。リュウの体は久しく忘れていた緊張に異常なほど活性化されていた。わくわくする。

唇の端がきゅっとつり上がると、ゆっくりと息を吐いた。

それから、唇の端に笑いを貼り付けたまま、パルスブラストのホルダーに差し込まれているヒトデのような形をした装置を引き抜いた。

それは直径一五センチほどで、中央に丸い鏡のようなものがはまっている。

パルス・ミラーだ。

リュウは、それを手に持つと身構えた。息を整える。

「はっ」

気合いと共に筋肉を躍動させる。

しなやかな筋肉はすさまじい爆発力を示した。

遠心力で手の先に血液が集まるのを感じながら、手首のスナップを効かせた。

パルス・ミラーは、狙い通り、ならず者たちの斜め上に飛び去った。

見当違いの方向に飛んでいく小さな円盤を見て、ウルフ・バックの男達はせせら笑った。

「どうやら、恐怖で、おかしくなっちゃったようだな」

「さすがのリュウ・バセラも俺達にかかりやあ、赤子も同然さ」

ミラーは美しい軌跡を描きながら、ならず者達の頭上を越えて行き、鈍い音を発してビル壁に突き刺さった。

その位置は、容赦無い攻撃を加え続ける男達の斜め上だ。

リュウは、ホルスターの上に出ているピンを操作した。

壁に刺さった鏡がそれに合わせて向きを変える。

盾にしている路地の壁は、今にも崩れそうに唸りをあげ出している。

リュウはパルス・ブラストを引き抜くと、慎重に狙いを鏡にあわせた。

V字に広げた親指と人差し指の間にブラストを落とし込み、腕と銃身がまっすぐになるように構える。地上付近とミラー付近の温度差から、パルスの角度変化をはじき出し、ミラーの斜め上を狙い、引き金を引いた。

強力な銃が、こもった音を立てると、光線がビルに突き刺さったミラーに命中した。

中央の鏡部分から外れた光線が、パルス・ミラーの刺さったビルに当たると、すさまじい熱量がビルの材料を膨張させ、見かけ上の爆発を起こす。

円盤は壁から抜け落ちた。

しかし、その時には、鏡の部分に当たった大部分の光線はきれいに反射されて、斜め上から単一方向性バリア発生装置を破壊していた。

ウルフ・パックの連中は、頭上の爆発に気を取られて、その事に気づいていない。

リュウは路地から飛び出すと、一回転して地面の上に降り立った。

「野郎、出て来やがったぜ」

「命乞いでもするのかあ」

バリアから立ち登る白煙に気づかない男たちは、せせら笑いながら、リュウに狙いを合わせた。

リュウは無造作に、大男の体の中心を狙って打った。バリアの存在を信じていたナインスは、驚愕した表情のまま数メートル吹っ飛んだ。

次の瞬間には、残り4人全員が倒されていた。

「し、信じられねえ。銀河最強と言われた俺達を……」

パルス・ブラストを構えたままリュウが近づくと、リーダーのナインスがうめくように言った。

「それを鵜呑みにしたのがまずかったな」

そう呟いて、リュウは通りに落ちているパルス・ミラーを拾い上げた。



ナインスが、背後から瀕死の声を浴びせる。

「お前は、強え。確かに死神だ。だが、さすがのお前も、俺の上官だったフィフス大佐にかかれば……。俺の仇は大佐が……」

リュウは振り返ると、優雅に一礼をして言った。

「忠告はありがたく受けとっておく。先に行って待っている」

優雅な態度に似合わず、リュウの表情は硬かった。

俺達の世界は掛け値なしの弱肉強食の世界だ。

強いものだけが生き残れる。あるいは、悪運の強い者が。

最後の言葉を飲み込んで、リュウは、死の痙攣に捉えられはじめた傭兵達に背を向け、走りだした。

ジャン・ロックモンドの工場に着いて、時計を見ると一四分が経過していた。

ドアを開け中に入る。

ジャンが、真剣な表情でリュウを見た。

「どうだった？」

ビリが尋ねる。

「データ処理の端末はあるか」

リュウの質問に、ロックモンドは工場の隅の机を指さした。

情報屋のハンクから受け取った、チップをスロットに差し込みデータ検索のキ

ーワードを入力する。

二、三の短いデータを表示したのち、ディスプレイは、必要な情報を表示しだした。

「どうやら、ミルキィ・ソリムとマネージャーは、セシア星からまだ連れ出され

ていないようだ」

「なぜわかるの」

ビリ少年が尋ねた。

「もし彼らを誘拐した一味が二人を連れ出すとしたら、宇宙船をチャーターするしかない。だが、宇宙船の利用リストを調べてみたら、皆、身元の確かな者ばかりだ」

「自分達の宇宙船で連れだしたら……」

「ビリ、銀河の主な星では、出入りする船を厳重にチェックしているんだ。密輸を防ぐためにな。ちょっと、大気圏外を飛ぶだけなら見逃してくれるかもしれないが、惑星間宇宙船が不法進入することはまず不可能だ」

ジャン・ロックモンドが説明した。

リュウがディスプレイを見ながら、ロックモンドの後をひきついだ。

「そして、このリストからすると、現在、セスア星には自分自身の宇宙船を惑星内に持ち込めるほどの、犯罪のプロフェッショナルはいない」

ビリがディスプレイをのぞき込んだ。

「ん、一人だけいるじゃないか」

「リュウ・バセラか？こいつは関係ないさ」

リュウが興味なさそうに言った。

「俺だから……」

ビリが大声を出した。

「あんたが、あの……」

「密告して賞金でも貰うか？」

「馬鹿なことを言わないでよ……。でも、ジャンは知っていたの？」

大男は頷いた。

「薄々はな」

「もう一つ、手がかりがある。誘拐ってやつは、誰かが上から指図しているにしろ、自分達でやっているにしろ、実際に動いているのは、必ずその土地のならず

者たちだ。そこで、実際の手口と脅迫の方法から、この星で実行犯になりそうな奴でデータを絞りこんだ。すると、この二組のならず者集団が浮かんできた」

ディスプレイに表示される名前を見て、大男が唸った。

「ナツソ一味とグレコ一味か」

リュウは、ゆっくりと立ち上がった。

「さて、早速出かけよう。とりあえず、ナツソとか言う奴の所へ行くか」

ジャン・ロックモンドも黙って立ち上がった。

「ま、待って。ナツソとグレコって言ったら、ここらでも有名な大組織のボスじゃないか」

少年がジャンの足にすがるようにして言った。

「ビリ。お前は、ジルおばさんのところへ行つて事情を話すんだ。もし、俺が帰らなかったら、後はジルおばさんが面倒をみてくれるだろう」

大男はリュウに向かって続けた。

「リュウ・バセラ。もうここまででいい。礼を言う」

「だが」

リュウは、チップをポケットに滑り込ませながら言った。

「俺は、人に借りを作るのが嫌いだな。返せるときに返しておかないと、寝覚めが悪い」

「俺も行くぜ」

黒い瞳の少年も間髪をいれずに主張した。

「もし連れていってくれないなら、すぐに酒場に行つて叫ぶぜ。リュウ・バセラを見たつて」

リュウが、大きくつり上がった目で見つめながら言った。

「坊主。これからは遊びじゃない。場合によっては死ぬ」

「わかってらあ」

リュウはジャンを見た。

「よし用意しろ」

ジャンの言葉で全員が動きだした。

「では、まずナツソという奴の家に行ってくれ。場所は分かるか？」

浮揚自動車カスバに乗り込んだリュウは、操縦桿を握るジャンに言った。

「奴の家は、ここらの人間なら子供でも知っているさ」

その言葉の意味は到着して分かった。

森を背にした広大な屋敷を、数条のサーチライトが照らし出している。屋敷はぐるりと背の高い塀に取り囲まれていて、門の前には、近衛兵然としたボディガードが数人行き来していた。

屋敷から数十メートル離れた場所にカスバを停めたのに、ボディガードの一人が、こちらを指さして何かを言っている。

「まるで要塞だな」

リュウの呟きを耳にして、ジャン・ロックモンドが説明した。

「ナツソとグレコは犬猿の仲で、隙あらばお互いの喉を噛みきろうと狙ってる。それであんな警戒が厳重になるのさ」

リュウは肩をすくめた。

「まあいい。それじゃあ、とりあえず、ナツソとかいう奴にミルキイの事を聞いて来るとしよう」

ジャンが止める間もなく、リュウ・バセラは、ふらりとカスバから降りると、屋敷の右側に向けて歩き出した。

しばらくは、悠然と歩くその姿が見えていたが、やがて塀に沿って左に曲がると、リュウの姿は見えなくなった。

「コツコツ」

いつの間にか眠ってしまったビリ少年は、その物音に慌てて飛び起きた。

カスバの窓越しにリュウ・バセラの姿が見える。ドアを開けて時計を見ると、1時間が経っていた。

「駄目だったの？」

ビリの質問に、にやりと笑って、リュウ・バセラは手にした紙筒を手渡した。

「どうやら、ミルキイを拉致したのはグレコの方らしい。

ナツソの奴もそんな情報を手に入れていた。口を割らすのに手間取ったが、一度喋りだすと後は早かった。最後には、親切にもグレコの屋敷の見取図までくれたよ。古風な、紙に印刷されたものだが」

ビリ少年は、鋼鉄の意志を持つ、と言われていたナツソが、どの様にして口を割らされたのか聞こうと思ったが、リュウの目に宿る不吉な光を見て思いとどまった。

少年は、以前、靴の磨き方が気に入らないと言って、ナツソが無造作に靴磨きの老人を撃ち殺すのを見たことがあった。

ライルという、その老人には、孫娘が一人いた。

かわいい娘で、愛らしく、くるくるとよく動くきれいな眼をして、いつも笑っていた。

明るいことの少ないこの街で、ビリにとって彼女の笑顔は太陽に等しかった。しかし、その娘は、たったひとりの身内が死んでしまったその日から、決して笑わなくなった。

彼女の笑顔は消えてしまった。沈んだ太陽は二度と昇らなかった。

少年は、太陽を奪った者に課せられる罰は死しかないと思っていた。

だから、大ボスがこの無法者から、どの様な仕打ちを受けていたとしても自業自得だと納得した。ナツソの命など、彼女の笑顔の半分の値打ちもない。

「俺が言うことでも無いかも知れんが」

カスバが飛び上がり、グレコ邸へ向かい出してしばらくすると、リュウが言った。少年は再び眠りこけている。屈託のない笑顔からすると、夢の中で、再び太陽に巡り会っているのかもしれない。

「ミルキイ・ソリムの願いを聞いてやったらどうだ」

大男の表情が硬くなった。

「それは、お前には関係が無い。救出を手伝ってくれるのは感謝するが……」

リュウは話題を変えた。

「セシアは昔、王政だったと聞いた……」

「ああ、四十年前までそうだった。無血クーデターで今の政府が出来上がったんだ」

「さっきの情報の中に、ロザリ・ロックモンドに関するものがあった」

「……」

「セシア最後の女王、高潔にして儀を重んじる名君。徹底抗戦を叫ぶ臣下を説得し、民衆による無血クーデターを実現した。もともと今ではその名前も忘れ去られているが……。そして、その孫の名前はジャン。ジャン・ロックモンド、誰の事かは分かっているな」

「俺は……」

「四十年前ならともかく、お前とミルキイ・ソリムとの間に身分の違いはない。もともと、俺は身分制度って奴が嫌いだから、何年前でも同じだが……。なぜ娘の願いを聞いてやらない」

しばらくの沈黙の後、ジャン・ロックモンドは重い口を開いた。

「俺は、祖母を尊敬していた。幼くして両親を亡くした俺は、祖母から多くの事を学んだ。執政権譲渡しゅっせいけんに関しても、祖母が決めた事だ、俺には何の異存も無い。

王位を捨てたとはいえ、祖母の周りには、常に多くの高潔な騎士たちがいた。俺は彼らのようになりたかった。ただ一人の王に忠誠を誓い、それ以外には何も望まぬ騎士に。

今でも俺は、忠誠は愛情よりも高い次元に位置すると信じている。

祖母が、若く美しかった頃から仕え続けた老齢の騎士達は、祖母が亡くなった時に自らの命を断った。

俺が十三の時だった。

俺は、彼らのようになりたかった。だが、俺には命をかける者がいなかった。やがて、俺は自分が騎士失格だと思うようになった」

大男の声が低くなった。

「俺は、どんだん騎士道から外れて行った。嘘もついた。人も裏切った。いつしか俺は金の為だけに生きる無法者となっていた」

リュウは黙って聞いていた。

浮揚自動車カスバの唸りだけが聞こえている。

「セスアで手っとり早く金を掴む方法は、トーキサイト鉱山を見つける事だ。俺は、何もかもつぎ込んで、鉱山探しに明け暮れた。

吹雪の吹き荒れる高山で遭難した事もある。熱でカスバがオーバーヒートして、砂漠で死にかけたこともあった。何もかもが裏目にでた。俺は運から見放されていた。だが、死ぬことは恐くなかった。目標を持たぬまま生き続けることの方が恐かった。

ある時、俺は、数少ない山師仲間と喧嘩したあと、ふらりと立ち寄った空港で、宇宙船の事故があったことを知った。好奇心から出かけた避難所で、救出された立った一人の生き残りのミルキイに会った」

ジャン・ロックモンドは深いため息をついた。

「初めて見た時のミルキイは、保護ゼリーから取り出されたばかりで、泣きはらした顔で母親を捜していた。俺は、無性にその子を守ってやりたくなった。

だが俺に何ができる。その子がきちんと引き取られるのを見守る事だけだ。

空港に問い合わせたところ、その子の母親は事故で死んでいた。それどころか、粉々になった宇宙線の破片のほとんどは、太陽に吸い込まれ、その子は、どこも誰とも分からなくなっていた。ミルキイ自身もあやうく太陽に飲み込まれるところだったんだ。航行記録を見ても、どこにも船の記録は残っていなかったらしい。

やがて、ウイラム市の幹旋で、子どものない夫婦にその子は引き取られる事になった。

だが、迎えにきた夫婦は、俺の見るところ、明らかに子ども嫌いだった。

心配になって後をつけると、案の定、夫婦の会話の端々から、国から保育の金をもらい、家で使うだけ使って、そのうちに子どもを捨よう、と言っているのが聞こえた。

その夫婦は、家に連れて帰る途中だけでも、泣きやまぬミルを二、三回殴りつけていた。とうとう、男が子どもを地面に叩きつけようとするのを見て、俺は飛び出し、男を殴り倒してミルを連れ去った」

リュウがぼそりと言った。

「セシアの黒騎士、か」

「俺は騎士じゃない。だが、ミルキイは不思議な子だった。俺の言うことは何でも聞いた。俺の前で泣いた事は無かった。そして、なにより不思議だったのは、ミルと暮し始めて。あれほど見放されていた運という奴が、この俺に戻って来たことだった。

俺はその頃知り合ったトッキーニという小悪党と、ミルキイとの三人で、セシア中を放浪した。苦しかったが、泊まるころも、食べるものもそう困りはしな



かった。どんなに辛くとも、夜、寝る前に歌うミルキイの歌を聞くと、元気が戻ってくるんだ」

「生まれながらの歌姫だったんだな」

「だが、ミルと暮らすうちに、俺は、俺の中にとくに捨てたはずの騎士道精神が蘇るのを感じだした。俺はミルのためなら死ぬ。報酬などいらぬ。

ミルにもっと楽な暮らしをさせてやりたくて、俺は、有り金全部をトッキーニに与え、一人トーキサイト鉱山を探しに旅に出た。幾度いくどとなく死にかけたが、俺はくじけなかった。恐れもなかった。ミルがいる限り俺は死にはしない。そういつた不思議な確信があった。あの時、俺はあれほど渴望した、祖母に仕えた騎士達の気持ちガ初めて感じる事ができたんだ。やがて、ほんの偶然から、俺は大鉱山を発見した。規模で言えばおそらくセシアで一、二を争うだろう」

「と言うことは、銀河のみならずトスカ星域の支配すら可能ということだな」

リュウの言葉に、ジャン・ロックモンドはわずかに肩をすくめただけだった。

「俺の力じゃない。すべてミルのおかげだ。シャンパンに流星が飛び込んでな。

だが、金ができて、裕福な暮らしをするようになって、俺は、自分と自分の汚れた経歴が、ミルキイにとって汚点になることに気づいた。そこで、俺はミルの前から姿を消すことにした。幸い、トッキーニの奴はうまく立ち回って、表だった犯罪歴は無かったから、奴にミルを守らせる事にした。彼女を守る男が現れるま

だ」

「お前の気持ちは分らんでもない。だが、お前の行動の中で、ミルキイ・ソリムの気持ちは、いったいどこにくみ取られているんだ」

「あんたならそう言うだろうな」

ジャン・ロックモンドは、かつてこの高名な無法者が、たった一人の女を守るため、全銀河を相手に戦ったことを知っていたのだ。

リュウは、黙ってジャンの顔を見た。

何かがおかしい。ジャンの言葉には嘘があった。それだけの理由なら、ジャンが、ミルキイの愛を拒む必要などないと思える。

ジャンの心に隠された秘密が、彼からミルキイを遠ざけているのだ。

「さあ、見えてきた。あれがグレコ邸だ」

ジャン・ロックモンドの指さす方角を見ると、ナツソ邸と同じ、難攻不落な感じの不気味な要塞が見えていた。ただ違う点は、ナツソは城塞風であったが、グレコは全体が銀色に光ってロケットのように見えることだった。

「今度は俺が行く」

カスバを停めて、リュウが下水口からグレコ邸に進入しようとする、ジャン・ロックモンドがそう言った。

「ミルを守るのは俺だ。誰にもミルを傷つけさせはしない」

「いいだろう。だが……」

リュウは、ふと笑顔を見せた。

「気がついてるか？それは恋人がさらわれたときに言う台詞だ」

それに答えず、ジャンは筋肉の盛り上がった肩でリュウを押しつけて下水に向かった。

リュウは、目を覚ました少年に言った。

「一時間で戻る。カスバで待機していてくれ。俺達の姿が見えたら、カスバのエンジンを開始して、すぐに出発できるように用意するんだ。もし一時間して戻らなければ、そのまま工場へ帰れ。いいな」

少年は、少し不服そうにしたが、やがて頷いた。

「分かった。大事な役目だからね。きっとミルキイを取り戻してくれよ」

リュウは親指を上立てて、少年の前に示した。

「俺はリュウ・バセラだ。一度口にしたら、必ず成し遂げる」

子どもが相手の場合は、恥ずかしい台詞も比較的容易に言えるものだ。

ナツソから取り上げた地図を頼りに、リュウ・バセラとジャン・ロックモンドは、下水の中を進んだ。

やがて、壁に取り付けられた換気口の前でリュウが言った。

「ここだ、十五メートル先にグレコの寝室がある」

ジャンは黙ってうなずいた。

リュウが先に換気口に潜り込んだ。エア・ダクトは、なんとか這って進むだけの大きさはある。

地図から、グレコの寝室であると思われる場所に来たとき、エア・ダクトの下から声がした。

「ご苦労だった。リュウ・バセラ君。それにジャン・ロックモンド君だったね」

換気口から出ると、扇型にずらりと並んだパルス・レーザーが二人を出迎えていた。中央に立つ銀髪の男がグレコらしい。

二人は銃を取り上げられた。

「実は、先ほどナツソ氏から連絡があつてね。急いで君達の歓迎の準備をしたというわけだ」

「それはご丁寧に」

リュウ・バセラは、優雅に一礼して言った。

「悪党同士も、たまには手を組むらしい」

「何を言われます。私たちは実業家ですよ。ああ、そうそう。ナツソ氏は本日で引退されるそうです。可愛そうに。くれぐれも、あなたによろしくとの事でした」

リュウは肩をすくめた。

「よろしく」というのは、どの程度の「よろしく」なのかと考えながら。

いずれにしろ、殺されることは間違いない。

「ミルはどこにいる」

ジャン・ロックモンドが叫んだ。

「おお、そうそう、忘れていました。今宵のメインゲスト、可愛い歌姫をお連れしましょう」

グレコが合図をすると、ドアが開いて、ひよろりとした男が、盛装したミルキイを連れてきた。

「ミル！」

「ジャン！」

駆け出そうとしたミルキイを男が引き戻した。

「おい、なんとかならないのか」

ジャン・ロックモンドが小声でささやいた。

「この取り囲んでいる二十人の雑魚だけならどうってことはない。だが、あの男が厄介だ」

現れた時から、リュウには、ひよろりとした男が、ただ者ではないことが分かった。

「フィフス大佐だな」

リュウの呟きを聞いて、男が答えた。

「ほう、見ただけで、私だと分かったのかね。どうやら、ナインスがあっさりやられたのも偶然ではないらしい」

「ミルを離せ。一体、どういう理由でミルを誘拐した」

グレコは、葉巻をシガーカッターで切りながら言った。

「お教えしましょう。どうぞお二人とも、すぐにフィフス君の手にかかるのですから」

銀髪の男はゆっくりと葉巻に火をつけた

「実は、最近、法王がある古文書を見つけられましたね。その古文書には、あるものが記されていたのです」

リュウが静かに言った。

「地球に眠る宝の事か」

グレコは、葉巻を下に落とした。

「なぜ、お前がそんな事を知っている」

「なに、無法者の間では、昔からそんな噂が流れているんでね」

グレコは、冷静さを取り戻した。

「そんな根も葉もない噂とは違う。法王が法王庁で見つけられたのだ。その古文書によると、人類発祥の地、地球には驚くべき高価な財宝と宗教の聖典が納められているとのこと」

「なるほど、それで財宝はお前が、聖典は法王がもらうってわけだな」

「黙れ、法王は、昨今の異教徒の台頭を懸念されているのだ！」

「それで、地球の聖典を書き換えて、ヌビル教こそが、宗教のルーツだと主張したいわけだ」

グレコは、もう少しで感情を爆発させるところであったが、驚くべき自制心で、それを抑えこんだ。ただの悪党ではない。

「だが、肝心の地球の位置が分からなければどうにもならん。

古文書によると、地球からの最後の離脱者が作ったと言われている、古の歌、『地球の青い海』のなかで地球の座標が示されているというのだが、それを解読した者は誰一人いないのだ。

しかし、最近になって、歌そのものが大切なのではなく、その歌によって、集まる者が重要であることが分かったのだ。

つまり、どういう理由があったのか分からないが、地球を脱出した人々の中に、将来地球へ帰る時のために、代々その座標を覚えておく『伝承者』と呼ばれる三つの家系が存在したらしい」

学生に講義をするような態度で、首を左右に振って、歩き回りながらグレコは続けた。

「三人の伝承者には、『地球の青い海』を完全に歌う者の要請に応じて、地球の座標を教えるように伝えられていた」

「なるほど、それでミルキイ・ソリムに歌を歌わせて、伝承者を集め、最後に彼女に座標を教える、と言わせるというわけか」

「だが、それならミルキイを誘拐する必要は無いだろう。それに、用がすめば、すぐに返せるはずだ」

「いや、それがちよつと、手違いがあつてね」

グレコが、ため息をついた。

「彼が伝承者の一人を手荒に扱いすぎたのだ」  
フィフスが続けた。

「なに、逃げようとしたのでね」

「人殺しを手先に使うとそういう事になる」

リュウが呟いた。

グレコは手を広げながら言った。

「それで、伝承者の一人が死ぬ前に、ミルキイ嬢に命令を發して貰おうと、急いでおいで願ったのだが、お連れするときに、彼女のマネージャー、何と言ったかな、ああ、そうそうトツキーニ氏だ。彼が不幸な事故にあわれてね。彼女を手離す訳にはいかなかったんだよ」

「なんだって、トツキーニまで……」

ジャン・ロックモンドがうなるように言った。

「我々は問題を山のように抱えていたんだよ。しかし、それも先ほどの問題だ。今はもう、何一つ問題は無くなった。彼女の命令で、伝承者達はそれぞれ三つの座標を教えてくれた」

それまで黙っていたミルキイが、叫ぶように訴えた。

「あの方達は、解放されたのでしょうか。特に、あのひどい怪我をされた方は、ちゃんと手当を受けたのですね」

その質問に、フィフスが薄く笑みを浮かべて答えた。

「解放したとも、悲しみからも苦しみからも永遠にね」

その言葉の意味を知って、ミルキイは真っ青になった。

「しかし、いくら彼女が歌を歌っているといっても、どうして、皆そこまで忠実なんだ。あれは、もともと法王が彼女に与えた歌なんだろう」

リュウはさらに質問をした。時間稼ぎをすれば、チャンスが来るかもしれない。

「ミルキイ・ソリムは、伝承者のリーダー、正統な歌姫の家系に属しているのだよ。」

彼女の母は、銀河ソサエテのリーダーだった、サー・ロナルド・カルソンの妻だった。

銀河ソサエテこそは、機が熟した時に地球文明の遺産を全宇宙に公開するため機関だったのだ。

だから、伝承者は彼女の家臣として、その命令に従った。

なぜなら、『地球の青い海』の完全な歌を知っているのは、彼女だけなのだから。

法王庁に残っているのは、一番だけなんだ。

私が、あるパーティーで、ゲストとして呼ばれた彼女が『地球の青い海』を歌うのを聞いた時の驚きを想像してみたまえ」

グレコは、何が面白いのか、くっくと笑った。

爬虫類が笑顔を見せたら、きつとこうだろう、という笑顔だ。

「それに、私とミルキイ嬢とは、浅からぬ因縁で結ばれているのだよ。

彼女の父上のカルソンと、私の父は政治上のライバルでね。彼女の本当の名前が、メアリ・カルソンであるように、私の本当の名前は、エル・ロージェンティというんだ。二人とも銀河ソサエテの出でね。もつとも、十三年前のイシユカオン号事故で、銀河ソサエテは壊滅してしまった。私は、その前に勘当されていたので死なずにすんだ」

グレコは、気取った身振りで懐中時計を取り出した。

「もつと、ゆっくり話をしていたんだが、これから法王と一緒に、地球へ向かわねばならないのでね。失礼させてもらうよ。後の事は、フィフス君に任せておく」

そう言い残すと、グレコは部屋を出て行った。

「xiii」

扉が閉まると、フィフスが不気味な笑顔を浮かべた。

「ショー・タイムだ」

フィフスは三人に、リュウのパルスブラストを突きつけて壁際にさがらせた。

「お前達は部屋を出て行け」

フィフスは、部下達を下がらせた。

「さあ、これで、邪魔者は居なくなった。誰から遊んで欲しい？」

サデイスト特有の甲高い声に、背筋が寒くなった。

さらに時間稼ぎをするために、リュウは言った。

「フィフス、お前は子供の頃、父親にかまってもらえなかっただろう」

フィフスの右眉がっり上がった。

「よく分かるな。私の父は軍人でね。物心がついた時には死んでいたんだ」

「父親の愛情が薄いと、往々にしてこういった異常性癖者が現れる」



リュウは、静かに言った。

しかし、本心は、絶望感に苛さいまれていた。

とにかく、我を忘れるほど怒らせなければならぬ。怒らせれば勝機が訪れる。

フィフスの顔が無表情になった。怒った証拠だ。

「まずは大盗賊どのから痛めつけてあげよう。じっくりといくよ。私は急がないんだ」

「あなたは狂っているわ」

ミルキイが冷ややかに言い放った。

そこには、何の怯えも恐れもなかった。

フィフスの眼が初めて蒼く燃えた。

彼のような男にとって、自分に恐怖を感じない者は、もっとも許し難い敵なのだ。

「気の強いお嬢さんだ。そうだ、あなたから始めよう」

フィフスがブラストのねらいをミルキイに合わせた。

「よせ！」

大男は、ミルキイをかばって飛び出した。

「馬鹿め！」

フィフスは、せせら笑いながら、パルス・ブラストを発射しようとした。

ちょうどその時、大音響が轟いて、部屋の上部の壁がフィフスの上落ちてきた。

壁から、カスバの前半分が覗いている。

ドアが開いて、ビリ少年が顔を出した。

「大丈夫、みんな！」

「ビリ！助かった」

大男は、ミルキイの手を引いて瓦礫を登った。

長いドレスの裾が、歩くのに邪魔になる。

ミルキイはそう見ると、躊躇せずに、膝上十センチでスカートを引きちぎった。形のよい足が乱雑なスカートの切口からのぞく。

ジャンは、カスバにミルキイを乗せた。

リュウはフィフスを捜したが、崩れた壁の下になったのか見つからなかった。ただ、パルスブラストだけが、瓦礫の手前に転がっている。

机の上に置かれていた、ホルスターをひつつかむと、パルスブラストを突っ込んで、リュウはカスバに乗り込んだ。

その頃になって、やっと武装兵士達が、部屋になだれ込んで来た。

「一時間たったけど、ジャンもリュウも出てこないから、一番明るい建物に突っ込ませてやったんだ」

カスバの中では、ビリ少年がミルキイに説明している。

「話をしている暇はないぞ。さあ、坊主。カスバを出すんだ」

「了解」

少年は、ジェット噴射を前方発射管に切り替えると、思いきりアクセル踏み込んだ。

派手な音をたてて、浮遊自動車はバックした。一旦、空中に出ると、ビリは前進に切り替え、全速力で飛び出した。

「どいへ行くの」

しばらく全速力で、グレコ亭から遠ざかると、ビリ少年が、後ろを振り返って尋ねた。

「ケリル地区に向かってくれ。そこに俺の宇宙艇が置いてある」

「了解」

リュウの言葉にビリは頷いて加速した。

「大丈夫か。ミル」

カスバの後ろでは、ジャンが心配そうにミルキイの顔を、のぞき込んでいた。

「私は大丈夫。あなたはどこも怪我をしなかった？ジャン。あなたは私を助けようとして、銃の前に飛び出してくれた」

「当たり前さ。ジャンは、本当にセシアの黒騎士なんだから」

ビリ少年が前を向いて、運転しながらそう言った。

「ビリ、もう少しスピードを出せないか。そろそろ、フィフスの奴が追いかけて来る頃だ」

リュウが言った。

「まだ生きているのか」

「奴がああ程度でくたばるわけがない」

「駄目だ！」

突然、ビリ少年が叫び声をあげた。

「さっきのクラッシュでどこか故障したらしい。どんどん、高度が落ちてる」  
ジャンがたずねた。

「ここは、どの辺だ」

「たぶん、ノーズウッドだと思うよ」

「ノーズウッド！物騒な所だ」

「だが、ケリル地区の隣だ。歩いてでも行ける。そこまで行けば俺の船がある」

「生きてりやな」

「生きてるさ」

やがて浮遊艇カスバは、惑星セシアで最も物騒なノーズウッドに着陸した。

夜明けが近づき、地平線が明るくなってきた。

辺りは見渡す限りの廃墟だ。

この地域は、十数年前に、宇宙船の巨大な残骸が降り注いで、廃墟になったのだ。

「よし、こっちだ」

カスバから取り外したナビマップを見ながら、リュウが言った。

一行は、リュウ、ビリ少年、ミルキイ、ジャンの順に隊列を組んで、ケリル地区目指して廃墟の中を歩き出した。

ジャンは、カスバに備え付けのパルス・レーザーを腰につけている。

一時間ほど進んだ頃、リュウは大男に手招きした。

「気が付いてるか？」

「ああ、さつきから気配がする。数が多いな。二、三十人はいるだろう。できれば戦いたくない。どうだろう、ミルに歌で説得してもらったら」

折角のジャンの申し出であったが、リュウは歌というものの持つ力を、そこまです信じることはできなかった。

「効果がなければかえって危険だ。もう少し様子を見よう」

やがて、朝日が廃墟を照らし出した。

すると、それを待っていたかのように、大勢の男達が姿を表した。

その中の、リーダーらしい男が前へ進み出て尋ねた。

「お前達は何者だ」

ジャン・ロックモンドがそれに応えた。

「俺達は、歌手ミルキイ・ソリムの一行だ。知ってるだろう。あの『地球の青い海』を」

「知っている。我々は、みんな、とてもあの歌が好きだ」

「それは良かった。浮遊自動車が故障して不時着したんだ。ケリル地区まで行きたいんだが、通してくれないか」

「彼女が本当のミルキイ・ソリムなら喜んでここを通そう。だが、その証拠を見せて欲しい」

「ホログラフイで見たことがあるだろう。本物だ」

男達は顔を見合わせた。

「確かに似てるかも知れんが、証拠が無い」

リュウが言った。

「どうやら言葉で言っただけで分かる奴らではなさそうだ」

黙って腰の銃に手を掛けた。

すると、ジャン・ロックモンドがリュウの前に立ち、小声で言う。

「もう少し待ってくれ。俺が話をしてみる」

「おい、どうしたんだ。態度がおかしいぞ」

「彼らとは戦いたくない。彼らは犠牲者なんだ」

「何の犠牲者だ？」

「いいから任せてくれ」

そう言って、大男は振り向くと、リーダーの男に言った。

「もう一度言う。信じてくれ。彼女は本物のミルキイ・ソリムなんだ」

「口先だけの者は信じられない」

「どうしても、信じてくれないのか？」

「証拠がない」

緊迫した空気が辺りに流れた。

彼らが、今まさに戦いを開始しようとした瞬間、澄んだ歌声が廃虚に響き始めた。

「たゆたふ海に……」

ミルキイが歌い始めたのだ。

リュウは振り向いて、ミルキイの傍に立ち、彼女を守ろうとした。

目立つことをしたら、それだけで、敵の第一目標になる。  
だが、その時になって、リュウは男達の様子に気づいた。

彼らの誰もが、その澄んだ歌声に聞き入っていた。

誰一人として動こうとはしなかった。

ただ歌声だけが、凍りついたように動かない男達の間を流れて行く。

リュウは、眩しいものをみるような目つきで、その光景を見ていた。

今までの人生で、彼は歌声が、銃より迅速に、これだけ多くの無法者達をおと  
なしくさせるのを見たことが無かった。

やがて、ミルキイは歌い終わった。

しかし、誰も身動き一つしなかった。

この銀河系を遙かに離れた宇宙の果てで、命を張って生きてきた無法者達には  
よく分かったのだ。

人類発祥の地と言われる、地球への憧れを歌った、この歌の真実が。

しばらくして、ミルキイを取り囲んだ男達の一人痩せた初老の男が言った。

「もう一度、もう一度歌ってくれ」

ミルキイは、頷いて歌い始めた。

歌い終わると、さっきのリーダーらしき男が近づいてきた。

「行くがいい。この女性が本当に『地球の青い海』の歌手であることは間違いな  
い。今の歌が証拠だ。俺達全員が納得した。ケリル地区へ行くと言っていたな。

浮揚自動車で送らせよう」

「ジャン・ロックモンド」

浮遊自動車が発発して、しばらくしてからリュウが言った。ミルキイとビリ少  
年は、カスバの後部座席で流れる景色を眺めている。

「俺は、今日、初めて本物の歌の持つ力を知ったよ」

ジャン・ロックモンドは、ごつい髭面に、にやりと笑顔を浮かべるだけで何も言わなかった。

昼前に、リュウ達はケリル地区の倉庫街にたどり着いた。

「ここだ」

リュウは、倉庫の扉をゆっくりと押し開けた。

「ここはまだ誰にも知られていないはずだ」

「これからどうするんですか」

「当然、グレコの奴を締めあげるんだよね」

「法王も許せない」

皆が口々話しだした。リュウはそれを遮って言う。

「俺はこれから、グレコを追いかける。君達はここに隠れていてくれ」

「だめだ。俺も一緒に行くぞ。奴はトッキーニを殺しやがったんだ」

「それに、三人の伝承者の人たちも」

「みんな、黙ってくれ。宇宙は俺の縄張りだ。この宇宙艇があれば、相手が戦艦

でも負けはしない」

ミルキイ・ソリムが瞳を輝かせて言った。

「リュウさん。あなたは地球がどこにあるかご存じ？」

「いや。だがハンクに問い合わせて……」

「私は地球の座標を知っています。目的地が分かれば、どんなルートで行くか分かるのじゃないかしら」

ジャン・ロックモンドがうなずいた。

「その通りだ。ミル。早速その座標を教えてください」

「私も連れて行って下さる？」

「それは駄目だ。危険すぎる！」

「いやよ。あなたが行くななら私も行く。あなたが死ぬなら私も死ぬ！」

リュウは、裾を引きちぎったドレスを着て、顔に爆発のすずをつけ、興奮にきらきら眼を輝かせるミルキイ・ソリムを、心から美しいと思った。

おそらく、ジャン・ロックモンドも同じ気持ちだろう。

「分かった。みんな乗り込んでくれ。ジャン、ミルキイも連れて行く。いいな」

「仕方ない」

大男は、渋々頷いた。

「よし、みんなで手分けして、倉庫の隅の荷物を運び込もう」

荷物を、ほぼ積み終わった時、リュウが言った。

「ちよつと用事を思いました。さきに宇宙艇に乗っていてくれ」

そう言うと、リュウは外へ出て、倉庫と倉庫の間の暗闇に声をかけた。

「出て来いよ。フィフス」

それに応えるように、ゆっくりと姿を表したのは、ひよろりとした殺人鬼だった。  
た。

左手に銃を握っている。

「よく分かったな」

「さつき、宇宙艇のコンピュータが、俺のパルス・ブラストから電波が発信されていると教えてくれた。こんな事するのはお前しかいないだろう。そして、お前なら必ず一人で俺達を殺すためにやって来るはずだ」

「そう。お前がそうするようにな。俺とお前は嫌になるほど似ている」

「よせよ。俺はもう殺人鬼じゃない」

そう言うリュウの表情は硬かった。

「もう、だと。死神と恐れられたのは、昔の事だと言うのか？」

フィフスは、体を微妙に左右に揺らして歌うように言った。



「もうその話はたくさんだ。決着を着けよう」

「そうしよう」

言うなり、フィフスの左手の銃が火を吹いた。

だが、光弾は空しく壁に当たっただけだった。リュウは、全く不規則に左右にジャンプを繰り返しながら、パルスブラストを撃った。

だが、フィフスはすべてそれをかわした。

殺人鬼の反射速度は、リュウを上回っていた。

徐々に、リュウは追いつめられてきた。

ついに彼は、最初にフィフスが出てきた袋小路に追い込まれた。

「お前はよく戦った。恐らく、銀河一の戦士だ。私が保証しよう。だが、お前は甘さがある。それが致命的だ。五年前のお前なら、私など、ものの数では無かっただろう。残念だよ」

そう言いながら、フィフスは銃を構えた。

リュウは静かに、それに答えた。

「いや、実のところ、俺は昔とほとんど変わっていないのさ。特に自分の命が危なくなるとな……」

言うなり、リュウはフィフスの斜め後ろにパルスブラストを撃った。

フィフスは、余裕でそれをかわした。リュウめがけて銃を撃つ。

「ぐっ」

だが、次の瞬間、胸を押さえて倒れたのはフィフスだった。

「きさま、パルス・ミラーを倉庫の出口に……。おびき寄せられたのは、俺のほうか……」

目の焦点を失っていくフィフスの横を通り抜け、リュウは倉庫の出口に置いた円盤を拾い上げた。

倉庫に戻る。

「待たせたな。さあ、行こう。グレコと法王が待っている」

宇宙艇の操縦室に乗り込むと、彼は言った。

リュウは、ミルキイが告げた地球の座標から逆算して、グレコ達の宇宙船のコースを算出した。

「この分で行くと、あと数時間で追いつくな」

「さて、カスバの話の続きだが……」

ミルキイとビリを奥の船室で寝かせると、第二船室で、リュウはジャンに向き直った。

「良かったら聞かせてくれないか」

「何をだ？」

「真実をだ」

「隠していることなど無い」

言い切るジャンを、リュウはじっと見つめた。

「では、教えてくれ。なぜ、そこまでミルキイに負い目を感じる必要がある？それにノーズウッドの件も……」

「知らん。話すことなど何もない」

「あるいは、間違っているかも知れないが俺の話聞いてくれ。ノーズウッドの話だ。噂によると、あの地区は十数年前に宇宙船の残骸が落ちてきて廃墟になったという。

それは、ひよつとしたら、ミルキイの母親たち、銀河ソサエテが乗り込んでいた、イシュカオンの残骸じゃないのか」

ジャン・ロックモンドの目が激しく動いた。額に汗が浮かび上がる。

間違いなかった。彼は、ミルキイの船の事故に何らかの関係があるのだ。

だが、一体どんな関係があるというのだ。

一介の山師が、超豪華客船を破壊して一体何の徳になる？

「ひよっとして……」

リュウは続けた。

「ひよっとして、君は偶然に空港に出かけたのではなくて、宇宙船の事故があったことを知っていたんじゃないのか？」

ジャンの大きな体がガタガタと震えだした。

リュウは待った。

大男は、とうとう囁くような声で話し始めた。

「俺は、寂しかった。不安でもあった。十五の歳に全財産を投げ出し、何もかも捨ててトーキサイトの発掘に賭けること数年。何の成果も見られず、焦ってもいた。」

そんな時、一時しのぎに鉦山掘りをしていた時の知り合いから声を掛けられた。

調子はどうだ、奴はそう言った。調子良い訳なんか無い。

調子が良かったら、セシアの首都で豪遊しているさ。そう言うとな奴は、俺の背中をどやしつけ、だったら、俺たちと一緒に来い、どデカイヤマがあるんだ、と」

「どでかいヤマ？」

「サン・トラス帯だ、と奴は言った」

リュウは頷いた。

サン・トラス帯の名は知っている。セシアをぐるりと取り囲む、薄い小惑星帯のことだ。

「奴は、サン・トラス帯の小惑星にトーキサイト鉦が含まれていると考えていた」

「だが、小惑星にトーキサイトは存在しないはずだ。センサーが証明している」

「俺もそう言った。すると奴は、表面だけサーチしても、トーキサイトの有無は分からない。内部を調べて見ないことには。そう言った」

「数千もある小惑星を、一つずつ調べるのか？現実的ではないな」

「俺もそう思った。すると奴は、そんなまどろっこしいことはしない。俺たちには、強い味方がいるんだ、と言った」

「味方？」

「ルナティック・ドール」

バセラは、その名前も知っている。小惑星帯で三番目くらいに大きい星のはずだ。

小惑星は、確か五番目に大きいものまで名前が付けられていた。

「奴の計画は、ルナティック・ドールにリープ推進を設置して、サン・トラス帯を走らせて小惑星をさらに細かく砕く、というものだった。

その破片をセンサーで調べれば、トーキサイトの有無が分かる。

最初は荒唐無稽な計画に思えたが、検討してみると、かなり手軽に実現できそうに思えた。小型のリープ推進装置はジャンク屋で手に入る。直径二百メートルほどの小惑星なら、それほど大きな推進装置はいらない。ゆっくりでも、動いてさえくれば良いんだから。

もし、弾かれた小惑星が、セシアに落下しても、流星となって皆の目を楽しませるだけだから安心だ。さっそく俺たちは、おおまかな計画を立てて材料をルナティック・ドールまで運んだ。サン・トラス帯までなら、申請せずに宇宙艇を出せたからな」

「そこで、事故が起こったんだな」

「俺がきちんと整備したのに、最後に、仲間の一人が装置の出力をあげやがったのや」

その意味が、リュウにはよく分かった。

リープ・メカは、ややこしい機械だ。安定している時は子供のおもちゃより安全だが、いったん不安定になると神様でも止められない。

「結局、三人の仲間を乗せたまま、ルナティック・ドールは暴走を始めた。擬似ブラックホールが小惑星の前にできて、限りなくそこに落ち込む形で、惑星は加速を始めたのさ。だが、その時でさえ俺たちは安心してた。ドールの上の仲間のことは諦めがついた。覚悟の上の作業だったからな。それさえ考えなければ、小惑星の一つが遙かかなたに飛び去ることくらい何でもなかったのさ」

リュウは頷いて先をうながした。

「だが、地上に戻ってしばらくして、ノーズウッドに宇宙船の破片が落ちたという話を聞いた時、胸騒ぎが始まった。急いで計画を立てた奴を捕まえ白状させると、俺たちの隕石が原因だと言う。俺は、いても立ってもいられなくなって宇宙船の生存者がいるスペース・ポートに向かった」

「そういうことだったのか……」

ジャンは苦しげに言葉をつないだ。

「俺が原因でミルは事故に遭い、母親を失った。なのに、何も知らない彼女は俺を慕ってくれる」

沈黙が続いた。

突然、ジャンが口を開いた。

「リュウ。なぜ、ルナティック・ドールというか知っているか？」

「いや」

「光の加減とクレーターで、表面に笑う女の顔が浮かび上がるからだ。事故が起きてから、俺は、数え切れないほど、ルナティック・ドールが笑いながら、俺に向かってくる夢を見た」

「それで、ルナティック・ドールはどうなった？イシユカオンとぶつかって四散しきんしたのか？」

「今も飛んでいるのさ。三日周期の小軌道を描いて。恐ろしいスピードだな。時には亜空間、時にはこの空間と位相を変えながら……」

「本当か？」

「ああ。気になったので調べて見たんだ。間違いない。ドールは存在する。今の軌道だと、通常の航路ならまず事故は起こらないだろうが……」

気配に気づいて、振り向くと、ドアの横にミルキイが立っていた。  
蒼い顔をしている。

「ミル……」

「覚えているわ。女の人の横顔が浮かんだ小惑星。母は、保護ゼリーに包まれた私を、死んでからも抱き続けてくれた」

「すまない。ミル。許してくれとは言わない」

「何を言うの。事故はあなたの責任じゃないわ。わたしはあなたに感謝しているのよ」

そういつてミルキイは微笑んだ。

強い娘だ。この娘なら大丈夫だろう。

リュウは二人を残して操縦室に向かった。

操縦室に戻ると、船内に虫の鳴くような音が響いていた。設定しておいたアラームが鳴っているのだ。

「どうやら、法王に追いついたらしい」

ほどなく、宇宙の彼方に白い光点が浮かび上がり、それはどんどん大きくなり、やがて宇宙船の形になった。

「しかし、なぜ護衛船を連れてないのかな。仮にも法王でしょう」  
起きてきた、ビリが尋ねた。

「目的が目的だから、あくまでも隠密に行動したいんだろう」

「それに、法王のマークをつけた宇宙船を攻撃する者は滅多にいないからな」

その間にも、宇宙船はどんどん大きくなってきた。

ジャンとミルキイもやってきた。

ミルキイの目には涙の跡があり、ジャン・ロックモンドは落ち着きを取り戻していた。

突然、無線による呼びかけがあった。

「よく生きていましたね。リュウ・バセラ。だけど、その悪運もこれまでですよ。

あなたの宇宙艇のような小さい笹舟は、わがカルマ号の主砲で簡単に蒸発するでしょう。降伏するなら今の間ですよ」

次に、醜悪な声が叫ぶように続いた。

「もつとも、降伏しても決して許さないがね。いつひっひ」

リュウは無線の音量を小さくした。

「今のが法王か？ステキなナイス・ミドルだ」

「どうする？」

「闘うさ。状況は不利だが勝機はあるだろう」

すぐに宇宙船の後方から、二本のビームが伸びてきた。

「光子砲を積んでいたのか。だが、あの程度の精度なら逃げられる」

リュウ・バセラの操縦で、宇宙艇は生き返ったように生き生きと旋回した。

しかし、続いて何本ものビームに追いかけられるようになると、そんな余裕のあるかわしかたはできなくなった。

何度も間一髪でビームをかわさざるを得ない。

「さすがに、資金に余裕のある船は違うな。普通は、一発撃ったら数分は攻撃できないもんだが、カルマは数秒間隔で光子砲を撃ってくる。予備のエネルギー・バックを数え切れなくらい積んでいるんだろう」

口調は冷静だが、リュウ・バセラの額には汗が噴き出していた。

「これは！」

黙って宙図をにらんでいたジャン・ロックモンドが短く叫んだ。

大男は、予備の端末に座ると、猛然と計算を始めた。

「キリがないね。リュウ」

数十発目の光子砲を、きわどくかわしたバセラだったが、もう後がないことに気づいていた。

さすがに下手くそな射手も、数を撃つにつれて、狙いが正確になってきているのだ。

一方、強力な光子砲の弾幕のおかげで、宇宙艇はカルマには近づけない。

「俺の示す座標に向かってくれないか。バセラ」

ジャンが言った。

「ここは、ルナティック・ドールの軌道のすぐ近くだ。俺の示す座標に、指定の時間に着けば、カルマにドールをぶつけることが可能だ」

「計算は正確なのか？」

「信じる。ドールの動きについては、俺は、星系一詳しい」

「わかった。スクリーンで座標を指示してくれ」

そう言うと、急激な円弧を描いて宇宙艇を旋回させ、リュウ・バセラは、目的地に向かった。

「いいか。大切なのは、正しい時間に正しい位置にいることだ」

「よし」

その時、無線から狂ったようなわめき声が聞こえてきた。

「往生際の悪いやつらだ。はやく光子砲に当たって楽になりなさい。あなたたちのカルマは決して克服されませんよ……」

「あと、三十秒。目的座標までどれくらいかかる？」

「三十二秒だ」

「急いでくれ。あと十五秒」

「十七秒だ」



「もう少し。後十秒」

「よし、十秒だ。カルマはどうだ」

「ぴったりと後ろについている」

「三、二、一、反転」

リュウ・バセラの操縦で、宇宙艇はほとんどUターンに近い旋回を見せた。恐ろしいほどの慣性で、船体がきしみ、ビリは目の前が真っ暗になる。

「どうだ？」

後方監視カメラに映る映像を見て、ビリが叫んだ。

「だめだ。現れないよ」

リュウの声は落ち着いていた。

「もう少し待て」

その時、ゆっくりと旋回するカルマ号の直前に、巨大な小惑星が揺らぎながら実体化した。

リュウは無線のスイッチを入れる。

「グレコ。それに法王様。さよならだ。ルナティック・ドールの強烈なキスを楽しんでくれ」

返信は、訳のわからない叫び声だけだった。

カルマ号は、その白い優美な船体を頭から小惑星にぶつけていった。

離れて見守るバセラたちには、笑う女が頭からカルマを食べているように見える。

半分まで砕けた時、カルマ号が大爆発を起こした。

ルナティック・ドールは、いささかもその進路を変えることなく、陽炎かげろうのよ  
うに揺らぎながら亜空間に戻って行った。

後には、白いカルマの破片だけが残されていた。恒星の光を受けて、きらきらと輝いている。

「終わったな」

「ああ、終わった」

確かに事件は終わった。

だが、同時に、コンソールに座るジャンの広い肩にそっと手を触れるミルキイの姿を見て、リュウは思った。

今、始まったばかりのものもある。

「えっ？セシアには戻らないの」

ビリが驚いたように言った。

「ああ、俺も法王暗殺のお尋ね者になったし、地球に行ってから、どこか中央から離れた辺境の惑星へ引っ込もうと思ってな」

ジャンの言葉に、ミルキイが大きくうなずいた。

「それがいいわ。そうしましょう」

「だめだミル、君はセシアに帰るんだ」

「あら、ジャン。だって私も同罪よ。捕まったら多分……」

「連れて行ってやれよ。ミルキイは幸運の女神だろ。だったら、どこで暮らしても幸せになるさ。お前は騎士になりたいと願った。それならミルキイ・ソリムひとりの騎士になって一生守ってやればいい」

「じゃあ、僕は……」

「もちろん、あなたも一緒よ！」

ミルキイ・ソリムは少年の頬を両手で優しく包んで言った。

「それでは、君たちをどこか適当な星に降ろしてから、地球に向かうことにしよう」

「というわけだ」

リュウ・バセラは話し終えて、紅酒をあおった。

「それで、地球ではいったい、どんな事があったの？」

ミーナが、好奇心を剥き出しにして尋ねる。

「それはな……おっと今日は少し話し過ぎたな。もうそろそろセシト星に着くころだろう。その話はまた、次の機会にしてやろう」

「ひどーい。いったいどんな事があったの。ねえ、教えて！」

うるさく喚きたてるブレスレットを外し、リュウ・バセラはメイン・キャビンを  
を出て自室へ向かった。

腕輪が騒ぎ続けるメインキャビンには、大きな熊の縫いぐるみが置いてあった。

よく見れば、その熊の胸元のカードに「セシアで結ばれし二人の、セシト生まれの子に、R・B」と書かれてあるのが読めたはずである。

了